
魔法少女リリカルなのはM E G A M A X S A G A

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSAGA

【Nコード】

N9302Y

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国を壊滅させて早数ヶ月、ゼロが結成したグレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボット、そしてウルトラマンゼロのウルティメイトフォース・ゼロはダークロプスゼロと遭遇し、ロプスゼロの力により異次元へと飛ばされる。

そこは魔法、スーパー戦隊、仮面ライダー、星の戦士達、魔弾戦士、その世界のウルトラマンが存在する世界……。

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSA、始まります。

これはゼロシリーズのリメイク版です。

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（前書き）

ゼロシリーズのリメイクです。
ゼロなどは大丈夫な筈……。

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』

ベリアル銀河帝国を壊滅させ早数ヶ月。

光の国のウルトラ戦士、ウルトラセブンの息子「ウルトラマンゼロ」は別の宇宙で出来た仲間、赤い炎の身体を持つ炎の戦士「グレンファイヤー」、鏡を操る緑の線が身体にある銀色の鏡の騎士「ミラーナイト」、赤と白の巨大な口ボ鋼鉄の武人「ジャンボット」達と共に結成した新しい宇宙警備隊「ウルティメイトフォース・ゼロ」の4人はある小惑星に降り立ち、4人は話しあっていた。

『これにてパトロールは終了だな』

「ああ、ジャンボット。一旦光の国へ帰らねえとな」

グレンファイヤーは大きく欠伸し、早く帰るように言う。

「早く帰ろうぜ、こんな所いたら風邪退いちまう」

だがその時、こちらに幾つかの飛行物体が接近しているのが見えた。

「待てグレン！ こっちなになにか近づいている！」

「あん？」

ミラーナイトの言葉で、グレンファイヤーは上を見上げると1つ目の黒とオレンジの身体を持つ機械巨人……「ダークロプスゼロ」が腕をし字に組みあわせて必殺光線である「ダークロプスゼロショット」をゼロ達に放った。

「……ぐわあああ！！！！？」

「……」

「くっそ、ダークロプスゼロだと!？」

ダークロプスゼロは胸部を変形させ、「デイメンジョンコア」と呼ばれるものを出し、そこから相手を次元の彼方にまで吹き飛ばす超時空波動光線「デイメンジョンストーム」が放たれ様としていた。

「させるかよ!!」

「先制攻撃たあやってくれんじえねえか!! ファイヤースティックー!!」

ゼロと炎のスティック型の武器「ファイヤースティック」を持ってロプスゼロに攻撃仕掛けるが、ロプスゼロは素早い動きでゼロとグレンファイヤーの攻撃を後退して避け、デイメンジョンコアにエネルギーが充填される。

そしてデイメンジョンコアから嵐を巻き起こす様な「デイメンジョンストーム」がまずはゼロとグレンファイヤーに放たれる。

「ぐわああああ!!!!?」

「ゼロ!!」

『グレン!!』

ジャンボットとミラーナイトがどうにか2人を助け出そうとするが、彼等もまたデイメンジョンストームに巻き込まれてしまい、ウルティメイトフォース・ゼロはデイメンジョンストームによって割れた空、次元の彼方へ飛ばされてしまった。

＊

此処はゼロ達がいた世界にあった地球とは別の世界の地球……。

その地球の「海鳴市」のある公園で、2人の少年が倒れていた。

「つてて……んっ？」

その少年は顔が若干「DOG DAYS」の「シンク・イズミ」に似ていたが、彼よりも凛々しい顔をしていた。

少年は隣で眠っている少年の姿を見る。

その少年は「フェイト・ゼロ」の「ランサー」に似ており、一向に目を覚ます気配が無い。

シンク似の青年は自分の身体を見るや否や、目を見開きつつ顔をペタペタ触る。

「俺……地球人の姿になってんのか……？」

実はこの少年、お気づきになってる方もいるやもしれないが、ウルトラマンゼロが地球人の姿になったものだった。

「じゃあこいつは？」

隣の少年は誰なのか揺さぶって起こして見る事に。

「うつ……んっ？　だ、誰だ貴様！？　こ、ここはどこだ！？　みんなは……！？」

目の前の人物がゼロである事に気付かず、ミラーナイトはゼロを睨みつけ身構えた。

「その声からしてお前、ミラーナイトだな」

「なぜ私の正体を……？　まさか、ゼロ？」

隣で眠っていた青年はミラーナイトが人の姿になったものである。

「グレンとジャンボットは？」

「分からねえ、あいつ等とははぐれちまったみてーだな」

兎に角、此処にいても始まらないのでミラーナイトとゼロは歩き始めることに。

「だが、ゼロはまだ地球の年齢ではそこまで小さかったのだな」

「それを言うのならお前もだろ」

ミラーナイトとゼロの見た目は小学生ほどである。

「しかし、ここは見た所、親父達の言ってた地球だな」

ゼロやミラーナイトにとって、今目に映るものは全て珍しいものばかりだった。

「そう言えば、地球人と出会った時、名乗る時はなんと名乗る？」

流石に我々の名前をそのまま使う訳には……」

「そうだな……」

そこで2人は考えた結果、ゼロは以前同化していた人間の名前と、セブンが地球人の姿になった時に使っていた名前の苗字をとって「モロボシ・ラン」と名乗る事にし、ミラーナイトは「騎士^{きし}鏡太^{きやうた}」と名乗ることにした。

*

その頃、グレンファイヤーとジャンボットは……。

グレンに至ってはランや鏡太と同じ様に人の姿になっており、フェイトシリーズのギルガメッシュに似ているが髪の色は赤の少年になっていた。

彼は森の中で倒れており、そこに1人の青年が駆けつける。

「グレン！ おいグレン！」

ジャンボットと同じ声を発する青年。

「うーん……。宇宙帝国ザンギャックとの戦いで失われたスーパー戦隊の力を受け継いだのは……とんでも無い奴等だった！！」
「どんな寝言だそれは！？」

グレンファイヤーの有り得ない寝言にツッコみつつ、青年はグレンファイヤーを叩き起こした。

「いつてえ！？ なにすんだよ！？ あっ？ お前、誰だ？」

「ジャンボットだが？」

その青年は自分が「ジャンボット」であると言ってきた。

「なにいいいいい！！！？ 焼き鳥！？」

「焼き鳥では無い、ジャンボットだと言っているだろ！！ ほら、水を持ってきたぞ」

実はジャンボット、身体を縮小させる機能がジャンボットの状態で使えることが出来るらしく、もしもの場合は人の姿に変わる機能まであったらしいのだ。

そして、ジャンボットの容姿はガンダム〇〇のティエリア・アーデ似であり、グレンファイヤーを起こして歩き始める。

「ゼロ達は？」

「分からない、はぐれてしまったようだ」

ジャンボットはグレンファイヤーに此処はゼロの言っていた地球だということの説明し、ゼロの師匠「ウルトラマンレオ」の話を聞いたことがある為、一応地球人らしい名前を2人は考える。

「『岬 炎斬』。 どうだ？ カツケエだろ？」

「ナオの名前を借りて『鋼ナオキ』^{はがね}という名前で行くか」

「おい、無視すんな焼き鳥！ 焼くぞ！」

こうしてグレンファイヤーは「岬 炎斬」、ジャンボットは「鋼ナオキ」という名前が決定した。

彼等もまた歩き出し、森を抜けて街を歩き、人気のない場所を歩く。

「にしても腹が減った……。肉が食いてえ」

炎斬の腹が音を鳴らし、腹を手で押さえた。

「しかし、この星の金などは無いし……。どうしたものか。
私は一応別に何も無くても大丈夫なのだが」

そして耐えきれなくなったのか、また炎斬は道端で倒れてしまう。

「グレンー!!」

*

一方、炎斬とナオキを探しているランと鏡太はまた先程と同じ、かなり広い公園に戻って来ていた。

「グレンもジャンボットも見つからねえな」
「……………」

静かに林ばかりがある場所を見る鏡太。

「どうした？ ミラー……鏡太？」

「ああ、林の中でなにか聞こえたような……」

その時、林の中からなにかが爆発するような音が聞こえ、ランと鏡太は急いでその場所に向かう。

そこでは、変わった服装をした少年が黒い怪物と戦っており、怪物は少年に襲い掛かるが少年は右手からバリアらしきものを展開。

だが、ランと鏡太が乱入して怪物を思いっきり蹴り飛ばした。

「うおおおー！！」

【グオオオー！！？】

「ええっ！？」

ランと鏡太の乱入に、驚きつつも、鏡太が少年に駆け寄る。

「君、大丈夫か！？」

「あつ、はい……」

「ここは僕達に任せて君は逃げるんだ」

しかし、少年は「いや、でも……」となにか言いたげだが、ランは左腕の銀色のブレスレット、「ウルティメイトブレスレット」からメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を取り出す。

「ゼロ！ この少年の前で変身するのは……」

「仕方ねえだろ！ 生身でどうこう出来る相手じゃねえ！」

ウルトラゼロアイを目に装着し、ランは光に包まれてゼロの姿となり、頭に銀色の2本のブーメラン「ゼロスラッガー」が装着され、赤と青の身体を持つ等身大の「ウルトラマンゼロ」に変身し、すぐさま怪物を殴り飛ばした。

「シユアー!!」

【グゴオオ!!??】

両手をコキコキとな鳴らし、ファイティングポーズを構えるゼロ。

「テメーの相手は……俺がしてやるぜ!!」

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（後書き）

炎斬の寝言はもちろん声ネタですw

第2話 『Wの変身/2人で1人の仮面ライダー誕生』

光の国の戦士、ウルトラセブンが息子、「ウルトラマンゼロ」は一気に黒い怪物に突っ込んで行く、と強烈なパンチをお見舞いする。

「デリヤアア！！！！」

【グゴオ！！？】

さらにゼロは怪物に廻し蹴りを食らわれ、頭部に強烈チョップと次々強力な技を打ちこんで行く。

「シユア！！！」

【ギシャアアア！！！！？】

怪物が身体から黒い弾丸をゼロに放ってくるが、ゼロはそれらをなんとか避け、頭の上にあるブーメラン、ゼロスラッガーを怪物に投げつける。

「シエア！！！」

ゼロスラッガーは怪物を切裂き、真っ二つになったが、真っ二つの身体はまた元の1つの身体に戻り再生してしまった。

「なに！？？」

「再生した！？？」

戦いの様子を伺っていた鏡太も驚き、鏡太の隣にいる少年は「ダメだ、それじゃ……」と呟く。

「これならどうだ!!」

腕をL字に組みあわせ、必殺光線である「ワイドゼロショット」を怪物に発射し、怪物はあちこちに破片となって飛び散り、その破片は地面に当たると地面が凹んだり、木に当たると木が倒れたりして消滅したかに思われたが、再び再生し、身体から帯らしきものを出してゼロの両手、両足を拘束する。

「なに!? 離せ!!」

怪物を動きを封じたゼロに飛びかかる。

「ラン!!」

鏡太が助けに行こうとするが、それよりも先に少年が飛び出し、ゼロの前に立つ。

「バカ! 来るんじゃない!!」

「くっ!!」

少年は右手を怪物の前にかざし、バリアらしきものを展開して怪物の攻撃を防ぎ、なにか呪文のようなものを呟いて行く。

「ジュエルシード、封印!!」

バリアに弾かれた様に怪物はゼロを解放して吹き飛び、何処かに逃げようとするが少年がチェーンのようなものをバリアから出して怪物を拘束。

「今です!!」

「やるじゃねえか」

ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーの両側に装着し、そこから放つ光の光線「ゼロツインシュート」を怪物に直撃させる。

「逃がすかよっ!」

【ギシャアアア!?!?!?】

怪物はゼロツインシュートの衝撃でチェーンが破壊され、怪物はかなりの距離を吹き飛んでしまい、結局逃がしてしまった。

（今の状態だと、弱らせるのが最優先だな……）

少年はそう思いながら急いでその怪物を追いかける。

「逃がしてしまったか」

ランの姿に戻ったゼロに、鏡太が駆け寄る。

「ああ。それにしても、アレとお前の正体はなに……ってあり？」

ランと鏡太はあの少年を探すが見当たらず、この公園の中を探しまわったが、結局見つからなかった。

その頃、「高町家」という表札がある家。

「んっ？」

高町家の家のある部屋で、メガネをかけた頭にクリップをつけた少年「高町ライト」たかまちがなにかを感じた。

「この世界に、なにか来たようだね……」

それと同時に、彼の義理の姉である「高町なのは」はある夢を見ていた。

『誰か……僕の声聞いて！』

それは先程の戦闘がなのはの頭の中に流れており、赤い宝石を首にぶら下げたフェレットが誰かになにかを訴えかけようとしていた。

「朝だよ姉さん、起きないと」

「ふえ！？」

気付けばもう朝、なのははライトに起こされ、半分寝ぼけながら姉の「高町美由紀」たかまちみゆき、兄の「高町恭介」たかまちきょうすけ、父の「高町士郎」たかまちしろう、母の「高町桃子」たかまちももこと朝食を済ませ、友人の金髪の少女「アリサ・バニングス」つきむらと紫の長い髪の少女「月村すずか」と共に聖祥大付属学校にバスに乗って向かった。

そのバスにはライトも乗っているが、彼は隅っこで外を眺めてるだ

けであり、なのはやアリサ、すずかの会話に入ろうとしなかった。

「アンタも少しはなにか話したらどうなのよ？」

アリサがライトに言うが……。

「僕はそういうのが苦手なんだ。ごめんね」

ライトは申し訳なさそうにするが、アリサはため息をついてなのはとすずかと再びお喋りをしだす。

（ライトくん、どうしてあんなに他人を避けるのかな？）

すずかはライトに対してそう思い、一方でのランと鏡太は……。

*

「は、腹が……減って……」

「水……水で腹を満たせば……、でもやっぱり満ちた気がしない」

あの公園で一夜を過ごしており、ランはベンチでぐったり倒れ、鏡太はフラフラしながらも水を飲みに行こうとする。

因みに元の世界に帰ってセブン達にジャンボットとグレンファイヤーの搜索を手伝って貰おうとウルティメイトブレスレットの力をおうとしたが、力が足りないのか、次元を超えられなかった。

さらに言えば、ここが自分達のいた世界の地球ではないか調べた所、かつて地球を訪れたウルトラマンを知る者は誰一人としていなかった。

なお、ランが戦闘を行った場所はボロボロであり、警察などが来ており、立ち入り禁止になっているが此処までは立ち入り禁止にはなっていない。

鏡太もあまりにも空腹な為、鏡太は倒れこむ。

そこへ偶然通りかかった茶髪のチャージを着た男性が2人に声をかける。

「大丈夫か!？」

その男性は「トゥモロー・リサーチ」と呼ばれる何でも屋を経営しており、2人を担いでそこまで運んだ。

「ウメーぞコレ!!」

「申し訳ありません、お世話になってしまい……」

ランはコンビニで男性……「浅見竜也^{あしみたしや}」が買ってきた弁当を美味しそうにガツガツ食べており、鏡太も竜也が買ってきて食べながら竜也に申し訳無さそうにしていた。

『お食事タイム!!』

「うおッ！？　なんだコイツ！？」

両腕を同時振り上げたりする小型のロボ、「タイムロボター」に驚くラン。

それに引き換え、鏡太は特に驚いていなかった。

ランもよく考えればロボターよりも凄いロボットや、他のウルトラマン達から聞いた兵器を知っていた。

ジャンボットとかメテオールとかガ○ダムとか。

「待て待て！　今なんか明らかにおかしいのがあったぞ！」

「誰にツッコミを入れてるんだラン？」

竜也はロボターを持ち上げてテーブルに置く。

「ああ、こいつはな、故郷に帰った俺の仲間が作ったロボットなんだよ」

どこか懐かしそうに、楽しそうに話す竜也。

「すいませーん、ジェット便です」

とそこへここへ宅配にきた男性が入ってきた。

「あつ、天馬！」

男性の名前は「くどう てんま工藤天馬」という名前であり、決められた時間内に宅配ものを配る宅配便である。

「荷物持ってきました竜也さん」

小さな段ボールの荷物を笑いながら竜也に渡した後、天馬はランと鏡太を見る。

「えーっと、隠し子？」

「なにをどうしたらそうなるんだよ!？」

苦笑いしながら言う竜也、その後、天馬はバイクに乗って仕事に戻り、竜也に「家とかはどこ？」と質問され、困り顔のランと鏡太だが、仕方なく鏡太は自分達には帰る場所が無いと説明。

竜也は敢えてその理由を聞かなかった。

「帰る場所が無いならここにいていいよ。でもさ、話す気になつたらちゃんと俺に言ってくれよ?」

ランと鏡太の肩を優しく叩き、笑顔を向ける竜也。

「どうして……」

「まあ、見た感じ、君等家出かなんかだろ? 俺も家出中だし、だから俺が注意したら『お前が言うな!』って感じになっちゃうからさ」

苦笑いする竜也。

そしてランと鏡太はトゥモロー・リサーチに住む事になった。

*

その深夜の出来ごと、ランと鏡太はなにかを感じたのか、目を覚ました。

「ラン……」

「お前も感じたか」

外に出てランと鏡太はそのなにかを感じた場所へと走って行った。

空を見上げれば空の色は茶色い。

明らかに異変が起きている証拠だろう。

とある「獅子動物病院」というその名の通りの動物病院で、学校帰りに夢でみたあの傷付いたフェレットを発見し、それをここの獣医である「獅子走」ししかけるに診て貰った所、命に別状は無く、一度ここでフェレットを預かって貰うことにした。

しかし、なのはと念の為ということで何かが入ったアタッシューケースを持ったライトは此処から誰かが呼んでいる気がした為、ここへまで来た結果、あのフェレットがランが一度は撃退した怪物に襲われており、なのはに向かって飛びこんだ。

「な、なにアレ!？」

「来て……くれたの？」

「えっ？」

フェレットがいきなり喋ったことに動揺するのは、対するライトはフェレットにかなりの興味を持った。

「興味深い! 喋るフェレット! ゾクゾクするね」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょライト!!」

なのははフェレットを抱えてライトと共に逃げだす。

フェレットの話によれば、ある物を集める為に此処とは違う世界からやってきたそうだ。

そしてなんでもなのはには「魔法」の資質が高いらしい。

「魔法……?」

「魔法!？ それは一体どんなのだい!!？ 是非とも教えてくれ！」

(ライトの検索バカが)

少々ライトの今の状況とは裏腹に楽しそうに喋る為、なのははライトに少し呆れていた。

「取り合えずこの子のことは気にしないでいいから」

「えっ? あっ、うん。 兎に角、君には資質がある。 だから僕

に力を貸して! お礼は必ずしますから!」

「お礼とかそんな場合じゃ……っ!？」

そこへあの怪物がなのは達に襲い掛かって来たが、突如現れたランと鏡太の飛び蹴りを喰らい、怪物は蹴り飛ばされた。

（アレ？ デジャヴ？）

とフェレットは思った。

「まゝたデメーか」

「ラン、分かってると思うが……」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すラン。

「いや、そう易々と人がいる前で正体を明かしていいのかラン！？」

鏡太のツッコミを無視し、ランは変身しようとするが、怪物の放った帯の攻撃を手に喰らい、ウルトラゼロアイが飛ばされてしまう。

「つてえ！？ ヤローー！！」

「予習してますね……」

ランはウルトラゼロアイを取りに行こうとするが怪物は帯を伸ばし、ランと鏡太を叩きつける。

「「うわあー！？」「」

「止むを得ないかな……」

ため息をついたライトはランの元に駆け寄る。

「ライト！ まさか……！！」

なのはライトがなにをしようか分かった。

ライトは倒れこんでいるランの元に駆け寄り、アタッシュケースを見せる。

その中には6本のUBSメモリのような「ガイアメモリ」があり、そして赤いバツクル、「ダブルドライバー」が入っていた。

「それは……」

「悪魔と相乗りする勇氣、あるか？」

ライトの言葉に戸惑いつつも、ランはダブルドライバーと黒いガイアメモリ「ジョーカーメモリ」を掴む。

ライトはダブルドライバーの使い方を手短に説明し、その間に鏡太が怪物を引きつけ、フェレットもなのはにあの赤い宝石を渡して手短に説明をすると、ランはダブルドライバーを装着すると同じものがライトの腰にも現れる。

緑のガイアメモリ、「サイクロンメモリ」をライトは持ち、ジョーカーメモリとサイクロンメモリのスイッチを押すとガイアウエスパ―が鳴り響く。

【グル……？】

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

そしてガイアメモリを2人はダブルドライバーに差し込む。

「「変身!!」」
『サイクロン・ジョーカー!』

ライトのダブルドライバーに差し込まれたサイクロンメモリはランのダブルドライバーに転送され、ライトは目を閉じて倒れるとランの身体が変わって行き、右は緑、左は黒、額には「W」と書かれたマーク、両目は赤の「仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカー」に変身した。

「なんだよコレ……、マジで変身した」
『これがダブル……、仮面ライダーダブルだ』

右目が点滅し、ライトの声が聞こえる。

一方、なのはもフェレットから魔法の説明を聞き終えた。

「僕と同じことを続けて喋って!」
「う、うん」

フェレットが呪文を唱え、なのはもそれに続く。

「レイジングハート、セットアップ!!」

最後にそう叫ぶと桃色の光に包まれてなのはは聖祥の制服に酷似したバリアジャケットと呼ばれる服を着た。

宝石は「レイジングハート」という杖に変化し、なのはは突然の事に戸惑いまくる。

「ふええええ!!!? どうなってるの!?!」

「落ちついて僕の言うことをよく聞いて！」

だが、怪物が黒い帯を伸ばしてなのはに攻撃してきたが、なのはは咄嗟にレイジングハートを構えるとレイジングハートはバリアを展開して攻撃を防ぎ、そこへダブルが両足に風を纏わせた蹴りで帯が千切れる。

【グオオオオ!!?】

「スゲーな、これ！ んっ？」

ダブルは足元に落ちていたウルトラゼロアイを回収し、そのまま怪物に突撃する。

『僕達が奴の動きを封じる、その隙にそのフェレットからの対処法を聞いてくれ姉さん』

「う、うん」

ダブルは怪物へと突っ込んで行き、帯でダブルを叩きつけようとしたがダブルは高く飛び上がり、ストレートパンチを怪物に叩きこむ。

【グボ!?!】

『ここは一気に決めるよ、君、名前は?』

「モロボシ・ラン」

ジョーカーメモリを引き抜き、右腰のマキシマムスロットにメモリを装填する。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ!』

ダブルの周りに風が纏い、空中へ浮かぶとダブルは右半分、左半分

に分かれてキック……「ジョーカーエクストリーム」を怪物に繰り出した。

「ジョーカーエクストリーム!!」

【グルアアアア!!!!?】

そこでフェレットからの合図があり、なのはのレイジングハートからピンク色のリボンが放たれ怪物を拘束。

「ジュエルシード、封印!!」

怪物にレイジングハートをかざすと怪物は消滅していき、弾け飛んであちこちに破片が飛び散る。

【ギシャアアアア!!!!?】

そしてレイジングハートの中に青い宝石のような「ジュエルシード」が入り込む。

その後、変身解いたランはライトも目を覚まし、空も元の色に戻り、パトカーの音が聞こえ始める。

周りを見れば辺りをボロボロ……。

「ま、まずいよ! 急いでここから離れないと!」

「ああ、落ちついた場所で色々話し聞くぞ!」

そしてラン、フェレットを抱えたなのは、鏡太、ライトはすぐさまそこから離れてあの公園へと向かった。

第2話 『Wの変身/2人で1人の仮面ライダー誕生』(後書き)

竜也はランと鏡太の親代わりに……。

次回予告

アंक

「はっ!?! ここはどこだ!?!」

フェイト

「怪獣……?」

かざかみひかり
風上光

「可愛いでしょ?」

カオスリドリ阿斯

「キエエエエ!!!!」

光

「僕と一緒に……戦ってくれる? コスモオオオオス!!!!」

次回『鳥怪人と金髪少女と優しさの巨人』

第3話 『小さな勇者』（前書き）

タイトル変わった……。

次回もコスモスだけど中心なのは……？

ハードボイルドなライダーも登場。

OP「Spirit」

ED「ウルトラマンコスモス〜君にできる何か〜」

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

登場。

第3話 『小さな勇者』

「またこの公園にくることになるとはなあ」

再び嫌な思い出しが無い公園へと来たランと鏡太。

そこにはなのは、ライト、フェレットがいる。

「んでっ？ 事情を話して貰おうか。 まず、ありやなんだ？」

ランの質問に、フェレットは答える。

「あれはジュエルシード」

「ジュエルシード？」

ジュエルシードとは、フェレット……「ユーノ・スクライア」が発掘した遺跡なのだが、大変危険なものな為、船で運んでいた所、何者かの攻撃を受けてジュエルシードは全てこの世界へと来てしまったのだ。

そしてユーノは本当は1人で責任を持って集めようとしていたが、やはり1人では無理があつたのだ。

「そついう君達は、何者なんですか!？」

ユーノの質問にランと鏡太はどう答えていいか分からず、ライトは取り合えずダブルの説明だけはしておくことに。

「あれは仮面ライダーダブル。 僕も君と同じく、別の世界からき

たんだ。 とある仮面ライダーに助けられてね」

ライトはその昔、別の世界でダブルが使用しているのとは別のガイアメモリ、人間を怪物へと変わるガイアメモリをライトの力を使い、「ミュージアム」と呼ばれる組織は制作していた。

ライトの能力とは彼の頭の中には「地球の本棚」と呼ばれる地球の全てとっていい程の知識が詰まっている。

だが、ライト自身もそれら全てを閲覧した訳ではないのだ。

そしてライトはガイアメモリを作るのを良しよせず、何度も逃げだそうとしては失敗。

しかしある時、1人の仮面ライダーが自分を助けてくれた。

ミュージアムがガイアメモリを制作しているビルに白い帽子を被った顔が渋い男性がライトを救いだす為潜入してきたのだ。

その男性の名は……「鳴海^{なるみ}壮吉^{そうきち}」。

壮吉はライトを探すが途中、幹部である黒服の男達に囲まれてしまう。

「ふう……」

複数の男性達に囲まれ、全員殺気を出しまくっているにも関わらず、壮吉は余裕の態度を見せていた。

一斉に男性達が壮吉に殴りかかってきたが壮吉はそれら全てをかわ

し、それ所が自分に襲い掛かってきた男性にはかならず一撃や二撃はパンチなどを決め込んでおり、次々と倒れて行く男性達。

「うおおおお！！！」

男性の1人が飛び蹴りを放ってくるが、壮吉も帽子が落ちない様に抑えながら飛び上がって飛び蹴りを放つ。

結果、壮吉の蹴りのみが男性に叩きこまれ、蹴り飛ばされる。

「ぐわああ！！？」

「フツ」

蹴り飛ばされた男性は立ち上がり、1本のガイアメモリを取り出す。

『マスカレイド！』

それを首筋に当てると男性はタキシードを着た黒い怪人「マスカレイド・ドーパント」となり、さらに複数のマスカレイド・ドーパントが現れ、さらには上半身は女性、下半身は芋虫のような「タブー・ドーパント」が現れる。

「こんな所にノコノコやってくるなんて……フフ」

タブーは壮吉に対して笑うが、壮吉は態度を崩さない。

「撃つていいのは撃たれる覚悟ある奴だけだぜ、レディ？」

「んっ？」

「ガイアメモリを仕事に使わないのが俺のポリシーだったんだが、止むを得まい」

壮吉はダブルドライバーのメモリを差し込む場所、メモリスロットが1つしか無い「ロストドライバー」を腰に装着し、「S」と書かれたガイアメモリを取り出す。

『スカル!』

「変身」

帽子を一度手にとって取り、メモリをスロットに差し込んで傾ける。

『スカル!』

壮吉は姿を変え、骸骨を思わせる黒いライダーへと変身し、最後に帽子を被って壮吉は「仮面ライダー スカル」に完全に変身した。

スカルは右の人差し指をタブーに向ける。

「さあ……、お前の罪を、数えろ!」

マスカレイド達が一齐にスカルへと攻撃を仕掛けるがスカルは殴りかかってきたマスカレイド一体の拳を受け止め、空いている腕でマスカレイドを殴りつける。

「トウ!」

「うおおお!」

2体のマスカレイドがスカルの背後に迫って来たが、スカルは廻し蹴りで一気に2体を蹴り飛ばして壁に叩きつけ、もう2体のマスカレイドの首を掴みあげる。

「おのれ……！」

タブーの放った赤いエネルギー弾がスカルに迫るがスカルは今掴みあげているマスカレイドを盾に使い攻撃を防いだ。

そこで銃型の武器、「スカルマグナム」を取りだし、タブーと撃ち合いとなる。

「んっ？」

スカルは偶然ここを通りかかったライトを発見し、タブーをなんとか巻いてライトの元へ向かった。

「自由になりたいか？」

そして牢屋のような部屋でジツとしているライトを発見したスカルがライトに問いかける。

ライトは頷き、スカルはライトにその手を差し伸べた。

「これからはお前の自由なように決める。自分の生きる道を自分で決める権利はあるからな」

そして壮吉はこの世界にいては何時までもミュージアムが追ってくると思い、ある者の力を借り、この世界の高町家へと預けた。

家族の温もりを感じさせるのは、高町家が1番だったからだろう。

*

そして現在、とある一軒家で炎斬は目を覚ました。

「メーガレンジャー!？」

と何か寝ぼけていたが。

「目覚めたのか、炎斬!」

そこへナオキがやってきた。

「あつ? 焼き鳥……俺は……。うう、腹減った」

炎斬はお腹を鳴らし、そこに1人の少年が入ってきた。

「あつ、目が覚めたんだ」

コードギアスの枢木スザク似の少年で、首には紐で通した青い意思をぶら下げて、名前は「風上光^{かざかみひかり}」である。

光は倒れている炎斬を見つけてナオキと共に此处まで連れてきた。

「食事、出来てますから食べていいですよ」

炎斬に光は微笑み、炎斬は「おお！ サンキューー！！」とお礼を言った後、食事があるリビングに直行した炎斬だった。

「すまない、こんな見ず知らずの私達をなにも聞かずに泊めてくれて……」

「ううん、僕、1人暮らしたから今まで、だから誰か来てくれた事には嬉しいんだ」

「1人って……家族はどうして……」

両親と兄は3年前に他界、今は親戚の仕送りで生活している。

なぜ親戚と暮らさないのかと聞いた所、親戚は大家族らしく、光曰く「迷惑かけたくないから、だから仕送りだけで十分」とのこと。

「それじゃ僕は用事があるから」

それだけ言うと光は家を出て出かけた。

*

とある森の中、そこでは巨大な鳥の怪獣、「友好鳥獣リドリアス」が木に隠れて大人しくしており、それを不思議そうに見る黒い服の

金髪の少女「フェイト・テストロッサ」と狼の耳と尻尾を生やした女性「アルフ」。

「これは……？」

リドリアスを不思議そうに見るフェイト。

「フェイト、危なそうだからさっさとここを離れようよ」

因みにリドリアスは眠っている。

「うん……、そう、かなあ？」

「いいから早く行こうって！ ジュエルシードも無いみたいだし！」

どうやらこの2人もジュエルシードを探しているらしい。

「でも、この子……優しい子な気がする」

するとリドリアスは目を覚ました。

「クエエ」

「ほら！ 目覚めちゃったよ！？」

心配するアルフだが、リドリアスは舌を出して優しくフェイトの頬をペロツと舐めた。

「ひゃっ！？」

「クエエ」

フェイトは一瞬戸惑ったが、特にリドリアスが襲ってくる気配が無

い。

「可愛いでしょ?」

突然のその声にフェイトとアルフは振り返るとそこには光があり、青い意思をグルグル回すと不思議な音が鳴り、リドリアスは何処か気持ち良さそうにしていた。

「リドリアスはね……。 あつ、リドリアスってこの子の名前なんだけど。 この音が好きなんだあ」

「へえ」

なぜかフェイトやアルフもその音を聞き、心が安らぐ感じがしていた。

だがその時、上空に光の粒子が複数現れた。

「なんだいアレ!？」

「綺麗……」

アルフとフェイトは粒子にそんな感想を述べるが、その粒子……「カオスヘッダー」はリドリアスに取りつく。

「キエエエエ!?!?!?」

「リドリアス!? どうしたんだ!?!」

急に苦しみ出すリドリアスに石を振りまわして落ち着かせようとする光。

だがリドリアスの顔は赤く、凶悪なものとなり、さらには爪が鋭く

なった「カオスリドリアス」へと変貌してしまう。

「ギエエエ！！！」

カオスリドリアスは翼を広げて飛び立ち、市街地へと向かう。

「リドリアス！！ そっちはダメだ！！」

光は急いで街の方へ走る。

「あつ、待つて！」

「フェイト！」

フェイトとアルフもリドリアスが気になる為、光について行く。

カオスリドリアスは市街地に現れ、口から青い光線を吐きだして街を破壊していた。

「ギイイイエエエ！！！」

さらには戦闘機が現れ、カオスリドリアスに攻撃を仕掛ける。

「やめて！！ リドリアスを攻撃しないでください！！」

戦闘機に向かって叫ぶが、そのパイロットは光の存在に気付く筈も無かった。

「リドリアス！！」

光は石を振りまわしてその音をカオスリドリアスに聞かせ、カオス

リドリアスの顔は元のリドリアスの顔に戻るが、それだけでは戦闘機での攻撃は止まず、リドリアスは再びカオス化してしまう。

「リドリアス……」

カオスリドリアスは光に向かい、青い光線を放ってきた。

「うわああああ！！！！？」

伏せて自分の死を覚悟する光。

（これで……僕も父さんや母さんに、兄さんの所にいけるのかな？
いや、まだだ、まだ僕は……諦めない！！）

その時、光線が光に直撃するよりも早く、宇宙からきた青い球体に、光は包まれる。

そしてカオスリドリアスの光線は光のいた場所に直撃し、爆発が起きる。

だが、光は青い輝く空間の中にいた。

「光……、また会えたな」

「コスモス……」

光の前に現れたのは、青い身体を持ち、胸にゼロとも似たクリスタルがある巨人が光に話しかけた。

彼と巨人は1年前、ある戦いを通して絆を深めていた。

「すまない、光。君を助ける為といえ、まだ幼い君に……」

申し訳なさそうに謝る巨人。

「いいんだコスモス、僕はリドリアスを助けたい、僕に……リドリアスを助ける力を！！僕は君になりたい！真の勇者になりたいんだ！！コスモオオオス！！！」

光の持っていた石が変化し、コスモスの蕾のようなスティック、「コスモプラック」を光は握りしめ、それを掲げるとコスモプラックは花を咲かせるように開き、青い空間から光は巨人と同化して「ウルトラマンコスモス・ルナモード」へと変身した！

「シェア！」

カオスリドリアスを戦闘機による攻撃から庇う様に、コスモスが現れる。

コスモスは先程言った戦いで、英雄的存在になっている為、戦闘機はすぐに攻撃を中止。

「キイイイ！！！」

カオスリドリアスがコスモスにその爪で攻撃して来たが、コスモスは避けてカオスリドリアスの背後に回り込む。

「キエエエ！！！」

「シュワッ！！！」

カオスリドリアスは腕を振るってコスモスに殴りかかったが、コス

モスは受け止めカオスリドリアスの腹部に右手をつけて押し返す。

「シェアッ！」

カオスリドリアスの攻撃は一切受けつけず、コスモスはカオスリドリアスの腹部を叩いて押し返して行き、カオスリドリアスは口から光線を放つがコスモスは受け止め、光線を弾く。

「ヘアッ！！！」

コスモスは「ルナスル・アイ」という怪獣の体内を見る技で、リドリアスにとり憑いたカオスヘッダーの居場所を特定し、そこから光の光線「ルナエキストラクト」を放ち、カオスヘッダーはリドリアスと分離させ、カオスヘッダーは消滅した。

「キエエエ」

苦しみから解放されて嬉しそうなリドリアス。

コスモスは頷くと、両手を広げて青い光の波をリドリアスに注ぐと、リドリアスの身体は薄くなり、そこから消え去ってしまう。

実はこの技、リドリアスを人がいない無人島へと移す技だったりする。

「シェア！！！」

そしてコスモスは飛び立ち、空の彼方へ消えて行った。

フェイトとアルフは光の姿を見失い、先程のコスモスの戦いを見て

いた。

「あの怪獣、どこに行っただろう……？」

「分かんないけどさ、取り合えず、ジュエルシードを探そうフェイト？」

「……うん」

フェイトはリドリアスも気になるが、光のことも気になっていた。

彼がどこに行っただのか……。

*

一方、その頃、この森の中で赤い鳥の様な、顔の右側が金色のトサカとなっている怪人「アंक」が倒れこんでいた。

「うっ……んっ？　なんで俺は、こんな所に！？　俺の意思の入ったコアメダルは映司が持つてる筈……！」

アंक……、「グリード」と呼ばれる怪人の1人であり、彼はその中の鳥の属性を持つ者。

彼の身体は銀色のメダルである「セルメダル」と9枚揃うと事で完全な復活をする為と身体を構成するメダル「コアメダル」で成り立つ怪人であり、アंकはある戦いにおいて恐竜系グリード「ギル」と「仮面ライダーオーズ」と共に倒したが、その時の衝撃のせいか、異次元へとアंकの殆どのコアメダルは破壊され、さらには彼の意

思が入った割れたメダルはそのオーズが持っているのだが、何故か彼は此処に存在していた。

しかも、壊れた筈のコアメダルも1枚を除き、殆ど直っている。

「兎に角、歩いてみるか」

取り合えずアंकは金髪のガラの悪そうな男性に変身し、歩き始めた。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』（前書き）

挿入歌1「Time judged all」

挿入歌2「Touch the Fire」

カオスヘッダー

古代怪獣ゴルメデ

カオスゴルメデ

登場。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』

アंकは海鳴市の街を歩き、辺りを見回してみる。

（……何故だ？ 普通なら俺の見るものは全て灰色にみえる筈）

グリードはメダルの怪物、即ち、なにを触っても、なにを見ても、なにを食べても、なにも感じない怪人である。

だが、そのグリードの1人であるアंकは何故かその逆になっていた。

普通ならば周りに見えるもの全ては灰色に見えるはずなのに、ちゃんと色がある。

ちゃんと見える。

そのことが不思議でならなかった。

（まあ、もう人間の身体を使うって気分にはなれなかったし、結果オーライって所か……）

さらにアंकはある物を取りだした。

「なんでこれまであるんだか……」

その時だ、突然アंकは緑色の雷を喰らい倒れこむ。

それと同時に周りにいた人々は逃げ惑う。

「ぐっ!?!」

だがすぐに立ち上がるアंक。

「誰だ!?!」

「久しいなあ、アंक」

「お前は……!」

緑色の虫の怪人「昆虫系グリード・ウヴァ」である。

そう、みんなの「ウヴァさん」である。

「ウヴァ!?! なんでテメーまでいるのか分からねえが、お前のメダルは持っていないぜ?」

「そんなことは知っている。だが、お前には消えて貰おうと思っ
てな!?!」

ウヴァの元にカマキリの性質を持つメダルで出来た怪人「カマキリ
ヤミー」、アゲハ蝶の性質を持つ「アゲハヤミー」が現れる。

アंकは怪人体となり、アゲハヤミー、ウヴァ、カマキリヤミーに
戦いを挑む。

*

光の家では光は洗濯物を外で干しており、炎斬とナオキは家事の手伝いをしていた。

「所で光……」

「はい？」

ナオキが光に呼びかけ、ナオキはある質問を光にぶつける。

「なぜ、パンツしか干していないのだ？」

光が干してるものは全てパンツ（トランクスの）だった。

「いやあ、だってパンツはかなり大事なものですから！ 明日のパンツさえあれば大丈夫なんですけど、予備とか必要かなって」

ナオキは頭に疑問符を浮かべており、光はそのままパンツを干し続ける。

「予備ってどんだけいるんだよ、パンツ」

炎斬は冷やかなツツコミを入れた。

だが、その内の1枚が風で飛ばされてしまい、光は慌ててそのパンツを追いつけた。

「あーっ！！ 明日のパンツウー！！」

「いや1枚くらいよくね！？」

炎斬のツツコミは聞こえず、光はそのままパンツを追いかける。

その頃、海鳴市に近い山奥で1体の怪獣が地中で目を覚まし、偶然が必然か、地中を掘り進んで海鳴市に向かっていた。

*

一方、フェイトとアルフは今日もジュエルシードを探して気配が無いか街の中を2人で歩いていたのだが、その時、フェイトの元に1枚の布らしくものが降ってきてフェイトはそれを掴んだ。

「んっ？ なにこれ？」

フェイトが布を確認するとそれは……。

光が洗濯していたパンツだった。

「「ええ！！？」」

フェイトとアルフは当然驚き、すぐさまそれを隠すかのようにしまいこむ。

「いや、なんで隠すのフェイト！？」

「だって変な子と思われたら嫌だし……」

確かに、女の子がトランクスなんて持ってたらしう思われても仕方

が無いのだが、もっと変に思われそうな者がくることになる。

「僕のパンツウウウウ！……！」

泣きながら自分のパンツを探す光がフェイトとアルフの目に入った。

「アルフ、あの子……」

「ああ、この間の奴だね」

フェイトはもしかしてと思い、光の元に駆け寄る。

「あ……あ、あの！」

身内以外で殆どこうやって誰かと話すことが初めてのフェイトは戸惑いながらも光に声をかけた。

「んっ？ あっ、君あの時の！」

光が笑顔で「どうしたの？」と聞くとフェイトはトランクスのパンツを光に返した。

「君が持ってきてくれたんだあ！ ありがとう！」

手を握られ、そこまで嬉しいのかと思うフェイトだった。

「えっと、どういたしまして……。それにしても、君無事だったんだ。それなので、リドリアスは……？」

フェイトはあれからずっとリドリアスの行方も気になっていた。

「リドリアスは今、人のいない島で大人しく暮らしてるよ。コスモスのおかげで！」

楽しそうに話す光に、フェイトは「コスモス？」と尋ねる。

「コスモスを知らないの？」

フェイトは頷き、コスモスのことをフェイトとそこにやってきたアルフに話し始める。

その時、ウヴァとヤミーの連帯攻撃を喰らって吹き飛ばされて転がりながら倒れこんだアंकが現れた。

「ぐがあ!？」

「な、なんだい今度は!？」

アルフがフェイトと光を庇う様に立つ。

それに気付いたアंक。

「お前等、危ないからすっこんでろ」
「えっ？」

光は怪人が自分達のことを気にかけるケースは珍しく、光はすぐにこの怪人、アंकが悪い怪人では無いことが分かった。

カマキリヤミーは両手の鎌でアंकに斬りかかるが、アंकは右手から炎を放ち、カマキリヤミーを攻撃。

「ギシャアア!!??」

しかし、その隙にウヴァがアंकの背後に立ち、アंकの背中にウヴァは腕を突き刺す。

「うぐう!？」

「背中がガラ空きだぞ、アंकー!!」

そこからアंकのコアメダル2枚を奪い取るウヴァ。

さらにアゲハヤミーは空中から麟紛をアंकに浴びせ、アंकの身体は火花を散らす。

「ぐわあ!？(クソッ、3対1な上にこっちはメダル2枚失った!…、どうするか)」

「うおおお!!」

すると光が太い木の枝を持ってウヴァに叩きつけた。

「なんだガキ？ 関係無い奴は引っ込んでいろ!」

ウヴァは光を払いのける。

「うわっ!？」

フェイトとアルフが光に駆け寄る。

「大丈夫?」

「う、うん、平気」

光は立ち上がり、ウヴァを睨みつける。

「関係あるよ、その怪人、僕等のことを守ってくれてる。だから関係ある、今からの付き合いだし！」

（あいつ……少し似てるかもな、映司に……）

アंकは鼻で笑うと光にあるものを投げ渡した。

「これは……？」

「バカな、何故それまで！ そいつを寄こせ！！」

ウヴァが光にアंकから投げ渡されたものを奪おうとするが、黒い衣服に身を包んだフェイトが鎌型のデバイスと呼ばれる魔法を使うもの、魔導師が魔法を発動する時などに必要なアイテム「バルディッシュ・サイズフォーム」でウヴァを斬りつけた。

「ぐわああ！！？」

「君は一体……？」

「話は後で！」

さらにはアルフが魔力で出来た弾丸、魔力弾をカマキリヤミーに放つ。

「空中にいる奴は私とアルフが！」

「お前、これ使え！！」

アंकが赤いメダル3枚を光に投げ渡す。

「楽して助かる命が無いのって、やつぱりどこも一緒なのかな？」
（はん！ とことん似てやがるかもな）

光はアंकに渡されたものを腰に装着すると帯が伸びてベルトとなり、ベルト……「オーズドライバー」の中央に3枚のメダルを入れて右腰にあるオースキャナーと呼ばれるアイテムを手にとり、それと同時にドライバーの中央を傾けてオースキャナーで中央をスキャン。

「変身!!」

『タカ! クジャク! コンドル! タ〜ジャ〜ドル〜!』

頭はタカを思わせる「タカヘッドブレイブ」、胴体はクジャクを思わせる「クジャクアーム」、下半身がコンドルを思わせる「コンドルレッグ」、そして胴体の中央には鳳凰を思わせるマークがあり、赤い姿……「仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ」に変身した。

「はああ……!!」

「キエエエエ!!」

カマキリヤミーがオーズに攻撃を仕掛けるが、オーズは軽かわし、カマキリヤミーを殴りつける。

「ハッ!」

「ぐわあ!?!」

ウヴァが爪型の武器でオーズへと斬りかかるがオーズはウヴァの腕を掴んで受け流し、両手でウヴァの腹部を殴りつける。

「やあああ!!」

「ぐおっ!?!」

その戦いを見ていたフェイトは、昨日のコスモスの戦い方と似てい

ると感じていた。

「余所見をするな――!!」

アゲハヤミーがフェイトに麟紛を放つがフェイトはプロテクションというバリアで防ぎ、フォトンランサーという金色の魔力弾をアゲハヤミーに放つ。

「フォトンランサー」

「ぐふう!？」

さらにはアルフがアゲハヤミーに接近してアゲハヤミーを思いっきり殴る。

「おりゃああ!!」

「ぐはあ!!?」

ウヴァは炎属性が弱点、つまり、タジャドルの属性は「炎」、オースの方が有利である。

しかし、ウヴァは触角から緑の電撃を放ってオースを近づけさせない。

その隙にカマキリヤミーがオースを捕え、ウヴァがオースに攻撃を喰らわせようと接近するが、アंकの放った炎に吹き飛ばされるウヴァ。

「ぬわあ!？」

そしてオースはカマキリヤミーから無理やり抜けだし、強烈な蹴り

をお見舞いした。

「やあああ!!」

バルディッシュを斬りつけられ、アルフは強烈なパンチをアゲハヤミーに喰らわせ地面へと倒れこむ。

「ぐうう!!?」

カマキリヤミー、アゲハヤミーの2体が揃った所でオーズとフェイトは一気にトドメと行く。

『スキヤニングチャージ!!』

オースキヤナーで再びドライバーをスキャンし、オーズの背中に翼が現れてオーズは飛行しコンドルレッグはコンドルの足のように変化し、その足で敵を切裂く「プロミネンスドロップ」と、フェイトの放った魔力刃「アークセイバー」を2体のヤミーは喰らい爆発した。

「ぐわああああ!!!!?」

「チッ」

舌打ちしたウヴァはすぐにどこかへと走り去る。

変身を解くと光は倒れこんでしまう。

「ううう……」

「あつ、だ、大丈夫!?!」

フェイトが光を心配するが、アंकが……。

「心配すんな、コンボは体力を削るが命に別条はない」

それを聞いてフェイトは安心するのだった……。

だがその時、突然地響きが鳴り、地中から1体の巨大怪獣、「古代怪獣ゴルメデ」が出現。

「グオオオオー!!」

「ほお、あれが怪獣ってやつか」

アंकはゴルメデを興味深そうに見ている。

「それより早く逃げないと……!」

だが、光が身体を起こして立ち上がった。

「早く……怪獣を大人しくさせないと……、また攻撃されちゃう」

疲れ切った声で光はコスモブラックを取り出す。

（あつ、でもこの子達がいるし……。どうしよう）

ゴルメデは口から火球を吐きだし、暴れ出す。

「グオオオオーン!!」

（此処は……!）

光は突然走り出し、慌ててフェイト、アルフ、アंकもそれを追う。

「ちょ、ちょっと待って!」

「おい!! 俺のメダル返せ!!」

光は3人をなんとか巻き、コスモブラックに語りかける。

「早くなんとかしないとまた怪獣が攻撃される。だから、力を貸して、コスモオオオス!!」

コスモブラックを掲げると、コスモブラックが開き、青い光の中から「ウルトラマンコスモス・ルナモード」が現れた。

「シェア!」

「グルウ?」

ゴルメデはコスモスを睨みつけゴルメデはコスモスに向かい突進してくるがコスモスは避け、ゴルメデはコスモスが突然いなくなったように思いこみ辺りを見回す。

「グウ?」

後ろを振り返るとコスモスがあり、「ゴアッ!?!」と鳴き声をあげて驚いた様子。

ゴルメデはコスモスに殴りかかるがコスモスは受け流し、両手でゴルメデの腹部を叩いて押し返す。

「シユア!」

「グオオン!!」

ゴルメデから距離をとり、右手から相手の感情を鎮める光の光線「フルムーンレクト」をゴルメデに放ち、ゴルメデは大人しくなる。

「グオオオオ……」

コスモスは頷き、リドリアスと同じ島に移そうと前回の技を出そうとした時、空中から光のウィルス、「カオスヘッダー」が現れてゴルメデに取りつく。

「ギオオオオ！！！！？」

「デヤッ！？」

カオスヘッダーはゴルメデにとり憑き、ゴルメデの生体エネルギーを吸収してゴルメデから離れる。

助けに行こうとしたコスモスは間に合わず、カオスヘッダーはゴルメデに酷似した凶悪な赤い頭を持つ「カオスゴルメデ」となって実体化した。

「ギオオオオオ！！」

弱り切ったゴルメデに火球を放ち、直撃を受けたゴルメデは倒れてしまい、目を閉じた……。

「はっ！」

コスモスはゴルメデに駆け寄り、抱きかかえるが、既に息は無い。

カオスゴルメデを睨みつけるコスモス。

「ハアア……シェア!!」

コスモスは拳を握りしめ、右手を掲げ、振り下ろすとコスモスの姿が変わり、赤き強さの姿、「ウルトラマンコスモス・コロナモード」にモードチェンジした。

「シェア!!」

カオスゴルメデに向かい走って行くコスモス。

「ギイオオ!!」

火球を放ってくるカオスゴルメデだが、コスモスに当たらず、コスモスは飛び上がったカオスゴルメデの背後に立ち、尻尾を掴んでスイングし投げ飛ばす。

「デアアッ!!」

「グルウ!!?」

コスモスとカオスゴルメデは掴みあいになるが、コスモスはカオスゴルメデを掴みあげて背負い投げを繰り返した。

「ヘアッ!!」

「グアア!!?」

ヨロツと立ち上がるカオスゴルメデに、コスモスは両手を前に突き出して放つ必殺光線「ブレイジングウェーブ」が放たれ、直撃を受けたカオスゴルメデは爆発四散。

「グオオオオオ!!!?!」

コスモスはゴルメデを持ち上げ、空に高く飛び去った。

「シュアー!!」

*

光はフェイト達と再び会い、光は急にいなくなったことを謝っていた。

「そういえば、名前まだ言って無かったね。僕は風上光」

「フェイト・テストロッサ、こっちはアルフ」

光とフェイトは自己紹介し、アルフは「よろしく」とだけ言い、その後ろにいるアンクに目をやる光。

現在、アンクは人間態である。

「もしかして……さっきの怪人？」

「ああ、それよりさっさとメダルを返せ!!」

アンクに言われた通り、メダルを光は返し、その後フェイト達と別れてアンクは行く所が無いようなので光の家に居候することになった。

因みにアंकは格好のせい、炎斬とナオキから警戒されていた。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』（後書き）

次回はゼロサイドに戻ります。

第5話 『アンドロイド少女の誘拐』（前書き）

今回はオリジナル怪獣（？）が〜。

後ヒットソングヒストリーのネタが……。

アンドロイド少女ゼロワン
ビッグゼロワン
登場。

第5話 『アンドロイド少女の誘拐』

ラン達となのは達は話し合った後……。

なのははユーノに協力して危険な力を持つジュエルシードを封印する為、ユーノの手伝いをする事に。

それにはランと鏡太も協力することになった。

ユーノはワザワザ危険な世界に来ることは無いとランと鏡太に訴えるが。

「ふざけんな、危険な世界なんざとつくに入ってるんだ。ここで退いてたまるかよ」

「ランの言う通り、それに、ユーノくんを責める訳ではありませんが、レディにそんな危険なことをさせるのを放っておく訳には行きません。これも騎士の務めです」

ランと鏡太が言い、なのはとユーノは「有難うございます」とお礼を言う。

「まあいいけどよ、なのはは見た所俺と同じくらいだろ？ 敬語じやなくていいぜ、ユーノは幾つか知らねえから言いようがねえけど」

なのはは「うん、分かった」と笑顔で答える。

「ユーノくんが例え幾つでも、あなたは目上の人に敬語を使わないでしょう?。」

鏡太にツッコまれ、ランは「うるせえ!!」と反発。

「まあ、確かに彼等の協力がある方がジュエルシードは集めやすいね。人数は多い方がいいからね」

ライトが言い、その後、ランと鏡太、なのはとライトとユーノはそれぞれ自分の家に帰って行った。

トウモロリサーチに帰ると竜也が2人がいなくなったことを心配しており、ランと鏡太を叱るのだった……。

「申し訳ありません、竜也さん……」
「わりい」

「でも、無事でよかった。今度からこんなことすんなよ?」

2人は竜也に頭を撫でられた後、3人は眠りについた。

*

翌日、ランが外を散歩している時、学校帰りなのか、なのはが神社の階段を登って行くのが見えた。

「よお、なの……」

なのはと言いかけたが、ランは神社の階段の1番下におり、なのはは結構上の方まであがっている。

つまり、今、ランが上を見上げればなのはのスカートの中が見えるという訳で……。

「ッ!!? / / / /」

すぐに顔を伏せるラン。

なのはが上へと上がり、姿が見えなくなった後、ランも階段を上りなのはを追い掛ける。

流石はウルトラマンレオの弟子というべきか、階段を上るなどあつという間であり、そこではなのはと肩に乗ったユーノが目の前に四足歩行に目が4つある獣のようなジュエルシードにとり憑かれた怪物がなのはと対峙していた。

「なのは!!」

「ランくん!？」

「こいつ、ジュエルシードの……」

ユーノがなのはに呪文を唱える様に言うが、あんなに長いのを覚えている筈も無い。

「もう1回教えるからそれに続けて!」

「じゃあその間、俺が時間稼ぎしとくぜ!」

ダブルドライバーを腰に装着し、ジョーカーメモリを取り出す。

「ライト!!」

ダブルドライバーをランが装着すれば同じものがライトにも現れ、意識を共通することが出来るが……。

『ああ、ちょっと後にしてくれないか？ 今『餅』というものを検索中なんだ!!』

餅についてなにか興味深そうに調べているライト。

「はあ!!!? んなこと言ってる場合か!!」

しかし、そうこうしてる間に怪物がラン達に襲い掛かってくる。

「仕方ねえ!!」

左腕のウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取りだして目に装着。

「デュア!!」

ランは等身大のウルトラマンゼロに変身し、ゼロの姿を初めて見るなのは「ふえええ!!!?」と驚いていたが、ゼロは襲い掛かってきた怪物を掴みあげ、地面へと投げ飛ばして叩きつける。

「デュア!!」

ゼロはなのはに振り返る。

「今の内に呪文とかつてのを教えてやれ!!」
「うっ、うん!!」

ゼロが再び怪物に立ち向かおうとした時、怪物はゼロの真上を飛び越えてなのはに襲い掛かってきた。

「きゃああ!!?!」
「なのは!!」

だがその時、なのはの持っていたレイジングハートが輝きだし、寶石から杖の姿に変わる。

(パスワード無しで!?)

襲い掛かってくる怪物を見てユーノは急いで防護服、バリアジャケットを纏うようになるのに言う。

「ええっと……!!?」
『スタンバイレディ』

レイジングハートから音声が鳴り響き、なのはが桃色の光に包まれて怪物は光にぶつかる。

「なのはあ!!」

先程の衝撃の際に吹き飛ばされ、無事着地したユーノとゼロがなのはに向かい叫ぶが、なのはは膝を突き、ホッとした表情をしていた。

「グルアアア!!」

怪物がなのはに飛びかかるが、なのはは「きゃあ!？」と悲鳴をあげながら咄嗟にレイジングハートを掲げると障壁が張られ、怪物の攻撃を防ぐ。

その際の衝撃で怪物はぐつたりと倒れこみ、気を失う。

(防壁で衝撃を……、彼女にはかなりの素質があるかもしれない)

とユーノは思っており、なのはのことをかなり高く評価していたのだ。

魔法の才能があると。

「なんだよ、俺変身したのにこんだけか？」

ランの姿に戻ったゼロ。

その隙になのははジュエルシードを封印、ジュエルシードにとり憑かれていた犬は無事解放される。

「えっと、こんな感じでいいのかな？」

「うん、出来過ぎってくらいに」

ユーノに褒められ、なのはは頬を赤くして「えへへ」と笑っていた。

＊

その頃、鏡太も同じくランとは別の方向で散歩をしていると、すずかとアリサが2人の同じ顔をした金髪の女性に担がれ、人間とは思えない程のスピードで走って行く。

「ちょっと話さないよ！！？」

「どこに連れて行くの！？？」

アリサが怒り気味に、すずかは不安気に、女性に言うが女性は何も答えず、ただ走るだけ。

「これは助けなければ！　テレパシーでランに伝えましょう」

ミラーナイト、グレンファイヤー、ウルトラマンゼロの3人はテレパシーで会話することも出来るため、鏡太はランにそのことを伝えた後、人目を気にしてる場合では無いので隣に停めてあった車の窓から鏡の中に入り、そのまま鏡の中からミラーナイトに変身。

「この姿になるのも久しぶりですね」

ミラーナイトは飛行してアリサとすずかを拉致した女性を追い掛ける。

そしてとある廃工場ですずかとアリサを縄で縛った女性2人。

「私達をどうする気よ？」

アリサの質問に、片方の女性が答える。

「有機生命体は抹殺する……。だからお前達も抹殺する。しかし、それは後回し、誰でもいいから囷に捕まえ、奴等おびき寄せて罠にはめる」

その誰でもいい人質を捕まえる際鏡太に見られていたが……。

「奴等……？」

首を傾げるすずか。

「ていうか抹殺ですって！？ ふざけないでよ！！」

アリサが女性2人を睨みつけて怒鳴る。

「こいつを黙らせろ」

右の女性が左の女性に言い、左にいた女性は拳をアリサに振りかざし、アリサは目を瞑ったが、何時までも痛みは来なかった。

恐る恐る目を開けると、目を見開くすずかと、アリサの目の前では女性の腕を掴んでいるミラーナイトが映った。

「親ならまだしも、見ず知らずのあなた達に……しかも誘拐犯にこの子達を叩く権利は無いと思いますか？」

ミラーナイトは女性を殴り飛ばし、2人を縛っていた縄を無理やり千切る。

「今の内にお逃げください」

「あ、有難う……」

「あなた……なんなの？」

「逃げるのが先決です。」

私にお任せを」

恐らく奴は人間では無い……、ここは

すずかとアリサは戸惑いながらも頷き、出口に向かって一直線。

そこには警備としていたやはり彼女達と同じ顔をした女性がいたが、全てミラーナイトが倒していた為、すぐにアリサとすずかは外に出ることが出来た。

それと入れ替わるように天井から等身大のウルトラマンゼロが参上する。

「シェアー!!」

ゼロは女性達を見て「んんっ？」と目を疑う。

「どうしました？」

「あっ、いや、以前親父含めるウルトラ兄弟の戦いの歴史『レジエンドブック』っていうのを見てさ、その中にこいつ等がいたんだよ、確か名前は……」

『アンドロイド少女ゼロワン』

それが彼女達の名前である。

指先から怪光線を放ってくるゼロワン2体。

しかし、ゼロとミラーナイトはかわし、ゼロはゼロスラッガーをゼロワン１体に投げつけて真つ二つに切裂かれ、ミラーナイトは手から放つナイフ、「ミラーナイフ」をもう１体のゼロワンに放って２体は爆発。

「呆気無かったぜ」

「いや、まだです!」

するとミラーナイトに倒された警備をしていたゼロワン達のパーツと、先程倒されたゼロワンが融合して巨大なゼロワンになるが、顔は銀色の仮面をつけている「ビッグゼロワン」へと変身した。

【……】

ビッグゼロワンは何も言葉を発さず、屋根を突き破ってゼロとミラーナイトが出てくるのを待っていた。

ゼロとミラーナイトはビッグゼロワンが巨大化する際に工場から出ており、ゼロ達はビッグゼロワンを見上げる。

「待ってんのか？　へっ、だったら俺が相手してやるぜ!」

ゼロは巨大化し、ビッグゼロワンがゼロに素早く殴りかかってくるがゼロはその腕をギリギリ受け止める。

（早え!）

ビッグゼロワンはさらに膝蹴りをゼロに繰り出すがゼロは直撃する前にビッグゼロワンから離れる。

「先制攻撃とはやってくれるじゃねーか。　だがな、本当の先制攻撃ってのは……本当の主役始まるんだぜ？　ディア！！」

【……！】

ビッグゼロワンはゼロの頭にゼロスラッガーが無いのに気付き、ビッグゼロワンの背中と右腕をゼロが操るゼロスラッガーに切裂かれる。

【……！？】

右腕はゼロスラッガーの攻撃により斬り落とされ、片腕だけとなるがビッグゼロワンは指先の胸から怪光線をゼロに放つ。

その光線は右や左に曲がったりなどどこから来るか予測不能だった。

「なに！？」

光線を全て喰らったゼロは吹き飛ぶ。

「おわあああ！！！？」

「ゼロ！！」

ビッグゼロワンは背を向けて何処かに去ろうとするが……。

「なんだ？　勝ったつもりか？」

【……！？】

ビッグゼロワンが振り返ればそこにはダメージを受けながらもゼロ

が立ち上がったいた。

「効かねえんだよ……、銀河の彼方にぶっ飛ばしてやるぜ!!」

ビッグゼロワンが怪光線を放とうとするが、それよりも早くゼロが動き出し、すぐにビッグゼロワンの懷に潜り込んで拳を下から上に向かい振り上げる。

「貰ったア!! シェア!!」

アッパーカットをビッグゼロワンに炸裂させ、そのまま高く殴り飛ばされ、ゼロスラッガーを手にとって融合させ、三日月型の剣「ゼロツインソード」を作りあげ、ビッグゼロワンを追い掛けてゼロは飛行し、ゼロツインソードで切裂く必殺技「プラズマスパーククラッシュ」をビッグゼロワンに炸裂。

「ブラックホールが吹き荒れるぞお!!」

【……!!!?】

切裂かれたビッグゼロワンは空中で爆発し、地上にいるミラーナイトにサムズアップした後、ゼロは消え去り、地上に戻ってランの姿に戻った。

ミラーナイトも鏡太の姿に戻っており、彼等はトゥモローリサーチに帰り、翌日。

「ラン、鏡太、君達にお客さんだよ?」

竜也がニコニコした笑顔で部屋に入れてきたのはなのはだった。

手には1つの箱を持っている。

「「なのは！／なのはさん！」」

「えっと、これこの前助けて貰ったお礼です」

笑顔でケーキの入った箱を差し出すのは。

「別に大したことはしてねえよ、結局最終的に解決したのお前とそれをサポートしたユーノだろ」

そつぱを向いて呟くラン。

「うん、だからユーノくんにもお礼はしたよ？ それに私1人じゃどうにもならなかったし、だからお礼」

「人の行為は素直に受けるものですよラン？」

鏡太にも言われ、ランはなのはから箱を受け取った。

「有難う」

「お礼を言うのは私の方、有難うランくん」

第5話 『アンドロイド少女の誘拐』（後書き）

レジェンドブックはウルトラマンの戦いの歴史を1から全部見たと
いうことに……。

無印のラスボスは、あのダイナを1度は倒したロボに似た奴に……。

ゼロワンってロボ……ですよね？
アンドロイドだし

第6話 『温泉激闘』（前書き）

フォーゼが出るんだったら「温・泉・激・闘」になるのにな……。
というどーでもいい眩き。

今回は飛ばして温泉の話に。

そしてランの見た目はあれなので……。

エースキラー

登場。

第6話 『温泉激闘』

今回は竜也がクジで温泉を当てた為、竜也、ラン、鏡太は温泉旅行へ！

「温泉ですか、私は入ったことが無いので楽しみですな」

「ああ、俺も！」

ランと鏡太は温泉に入ったことが無いので楽しみにしていた。

バスに乗って3人は海鳴市温泉に向かっておい、竜也が温泉の良さについて語っていき。

「温泉っていいよ。普通の風呂とはまた違うからな！」

2人にサムズアップを見せて竜也も旅館に着くのを楽しみにしているのだった。

「んっ？　なんか忘れてるような……、まあいいか」

ランが何を忘れていたのか、それはグレンファイヤーとジャンボット、炎斬とナオキの2人の搜索である。

まさに「焼き鳥はどうでもいいが姫さん返せ！」状態なのである。

*

その頃、光は高町家と交流が合った為に高町家の人達に誘われ、炎斬とナオキを引きつれて高町家の人達＋すずか&アリサと月村家のメイドとすずかの姉の忍でラン達と同じ温泉旅行に向かっていたのだ。

アंकは行きたく無いらしく、家に留守番中。

そして温泉に到着してなのは達はラン達と出会い、そうなるも強制的に炎斬とナオキの居場所が分かる訳で……。

「グレンー!! ジャンボット!!」

「うお!? ゼロにミラーナイトか!?!?」

という訳でここでラン、鏡太は炎斬、ナオキと再会し、再会を喜び合っていた。

「炎斬さん達の仲間ってこの人達だったんですね」

「おう、光」

光はラン達に挨拶した後、一同は温泉に入ることになった。

「ユーノくん一緒に入ろうね」

なのははユーノを抱えており、一緒に女風呂に連れて行くとする。

「キューー! キューー!」

ユーノは顔を赤くして必死になのは腕から逃れようとする。

「お風呂入るの嫌がつてるのかしらね？」

アリスがユーノを見ながら言い、ユーノはランと鏡太に助けを求める。

だが2人の目は……「すまん」と言っている目であり、ユーノは半分諦めかけたが……。

「ランくん達も一緒に入ろうよ！ 10歳以下なら一緒に入れるし」

無邪気な笑顔でそんな提案を出すなのはにランと鏡太と炎斬は吹き出しそうになるが我慢して耳を疑う。

「今、なんと？」

「だから一緒に入ろうよ！」

ランは必死に遠慮するが、なのはに腕を掴まれ引きずられる。

「ちょ、おい！？」

「鏡太くんは？」

すずかは首を傾げながら鏡太に尋ねる。

「そんな、今会ったばかりなのに一緒にというのは……」

鏡太も遠慮がち。

「ライトもこっちな〜?」

なのはがライトもくるように誘う。

「まあ、僕はどっちでも構わないけど」

ライトの性格上、女性の裸など興味が無さそうだった。

「私達は別に構わないよ?　ねっ、アリサちゃん?」

「ええ、別にいいわよ」

しかし、流石は騎士というべき所か、騎士らしく断る鏡太。

「申し訳ありませんが、私には女性の方と共に入浴するというのは断ろうかと思っています。私には女性の素肌を見るという権利はございませんから」

「じゃあ俺は!?!」

ランが鏡太に手を伸ばして助けを求めるが鏡太はランを無視。

「無視すんなコラア!!」

「因みにユーノは動物といえど一応雄、ユーノも同じくこちらに」

なのはからユーノをヒョイツと取り上げ、なのは、アリサ、すずかは「えー」という表情だったが、鏡太は頭を下げた後、男湯の方へと向かう。

「オンドウルラギッタンディスカー!!!?」

ランが鏡太に向かって叫ぶ。

「ランを助けられないのはあなたが金髪勇者似なので……」

にこやかに笑いながらそんな事を言いだし、ランは「そんな理由か！？」と鏡太に怒鳴るが、そのままなのはに女湯に連れて行かれた。

「まっ、諦めたまえ」

「じゃあ俺もそっちに……」

「アンタはダメ！」

炎斬が女湯に向かおうとしたがアリサに止められる。

「なんであいつはよくて俺はダメなんだ！ 同じくらいだろ！！」

「アンタ完全に下心丸見えなのよね」

「下心なんかねえよ！ 誰がお前みたいながキの裸見てえんだよ！！」

今の炎斬の言葉で完全に下心丸見えなのが分かった。

「つまり、美由紀さんとかならいい訳ね？」

ジト目で炎斬を見るアリサ、炎斬は「しまった」という顔をしており、ナオキに首根っこを掴まれて男湯に連れて行かれた。

「おい離せ！！ 焼き鳥！！ 焼いて食っちゃもうぞ！！」

「この無礼者！！ 何度言えば分かる！！ 焼き鳥では無くジャンボットだと言っているだろう！！」

そしてランを除く男性陣は男湯に入った。

「良い湯ですね、恭也さん」
「ああ、ホントにな」

恭也と鏡太はそんな会話をしており、炎斬は壁に耳を当てて隣の女湯の様子がどうなってるのか聞こうとしていたりした為、ナオキに殴られ壁から引き離れた。

「それにしても、ランは今頃いい思いしてんのかな」

竜也が笑いながらランのことを考える。

「所で、先程から気になったのですが……」
「んっ？」

鏡太が右の方向に指を差して恭也にあることを尋ねる。

「あの、あれはなんですか？」

その指を差す方向には胸に信号機をつけた青い身体のパロボットのよ
うな「シグナルマン・ポリス・コバーン」が頭にタオルを乗せて湯
に浸かっていた。

「あゝっ、生き返るなあ」

「おっ、シグナルマンさん！」

竜也はシグナルマンに呼びかける。

「おう、竜也じゃないか！」
（知り合いなんですか！？）

このシグナルマンは「激走戦隊カーレンジャー」と共に地球を守ったスーパー戦隊の1人、シグナルマンなのである。

宇宙警察なのだが、今は休暇中らしく、シグナルマンの妻と息子も来ているらしい。

「息子さんは？」

「いやあ、実は本官2回も温泉に入っているので、その1回目の時に息子と……」

ユーノは鏡太に助けられたことのお礼を言っており、鏡太は……。

「いやあ、こんな時のランでよねえ」

となにか黒笑みを浮かべていた。

一方女湯では……。

「//////////」

顔を真っ赤にさせたランがいたとか。

「ランくん背中洗ってあげようか？」

タオルを巻いたなのはがランの腕を掴んで背中を背中を洗おうとする。

「いい！！ 自分でやるからいい！！////////」

抵抗するランだが、その際右手が……。

『ムニユ』

「ムニユ……？」

「ふにゃ！？／／／／」

ランが自分の右手を見ると、ランはなのはのまだ成長途中の胸を触ってしまった。

「あつ……えつと、すいませんでしたああああ！！！！／／／／／」

「おや、ランも意外と大胆なんだね」

ライトがそんなことを呟きながら、外の風景などを眺めていた。

*

その後、顔がかなり真っ赤になっていたランとなのはだが、炎斬達には特に何も聞かず、ラン、鏡太、炎斬、なのは、アリサ、さすがに廊下を歩いていた時。

とそこにアルフが通りかかった。

「はーい、おチビちゃん達！」
「んっ？」

アルフがなのはを眺め……。

「ふゝん、君かね、ウチの子をアレしちゃっててくれるのは」

「なのは、知ってる人？」

アルフを睨みながらアリサがなのはに尋ね、なのはは首を横に降る。

「あんまり賢そうにも強そうにも見えないけどねえ」

「先程からなにを言っているのか分かりませんが、大の大人が子供に向かって1体なんなのですか？」

鏡太が一步前に出てアルフを睨みつける。

「おうおうおう！！　なんだテメーは！！　なのははお前のこと知らねえって言ってるぞ！！？」

「おい、落ち付けお前等」

ランが炎斬と鏡太を静める。

「人違いじゃないんですか？」

アリサの言葉でアルフは急に笑い出し、「そうだった、ごめん」と謝った後そこから去っていくが……その際なのはの耳元で「あんまり邪魔するとガブツと行くかもよ？」という発言をしており、なのははアルフの後ろ姿を見ていた。

一方、光は……。

「まさかこんな所でフェイトさんに会うとは思わなかったな」

林の中に隠れて枝の上に座っていたフェイトを光にこうも隠れてるはずなのにあっさり見つかり驚きを隠せないフェイト。

フェイトは目を見開いて驚いていたが、光はフェイトに会えて嬉しかった。

「なんでこんな所に？」

フェイトが光に尋ねると光は懷から蝶ガラのパンツを取り出す。

「いやあ、また飛んで行っちゃって。それを追い掛けたらここに来ててね」

何なのだろうか光のパンツは、飛んで行く度にフェイトの元に辿り着く。

「そ、そう」

だがフェイトも光と再会して少し嬉しい気分もあった。

「そう言えばまだ聞いて無かった。アレはなに？」

アレというのは恐らく魔法のことだろう。

フェイトは一瞬話すかどうか迷ったが、光ならば大丈夫だろうと思いい、全てを話した。

自分は別の世界からきたこと、母親に頼まれてジュエルシードを探していることなど。

「そつかあ、僕も手伝っていい！？ ほら、僕仮面ライダーだし、なにか力になれると思うんだ！ アンクから3枚メダル借りてるし」と光はタカ、クジャク、コンドルのメダルを見せる。

アンクが念の為に持たせたのだろう。

しかし、以前のアンクなら自分のメダルを3枚も貸すなど有り得なかったこと。

以前オーズになっていた人物の映司が見たら驚くか喜ぶかするだろう……。

だがフェイトはどうしよう……っと悩み所であった。

でも断つてもしっこそうだな……と思いフェイトは渋々承知。

「よかった」

*

その夜、この温泉の林の中にあるジュエルシードをフェイトは起動させて見つけ、それを封印してそれに気付いたなのは、ユーノ、ラッ、鏡太、ライトが急いで駆けつけた。

「あれ？ もう1人の魔導師ってなのはさんだったの！？」

実は以前なのはがずかの家に遊びに行った時、そこにジュエルシールドがあり、他の人達にはバレなかったがフェイトとなのははジュエルシールドを巡って争っていたのだ。

「光くん！？ どうしてそこに……！？」

光がフェイトの元にいることと、あの時の女性アルフがいることになのは達は驚いていた。

「えーっと、これは……そのっ」

目を泳がせてなんて言えばいいのだろうと迷う光。

「なぜジュエルシールドを集める必要があるんだい？」

「それは危険なものなんだ！！」

ライトがフェイトに質問し、ユーノは危険なものであることを訴えるが、フェイトは答えるつもりは無い。

「あなた達には関係無い」

なのはは出来るなら話し合いで解決したかった、だがフェイトは。

「私はジュエルシールドを集めなければならない。そしてあなたもジュエルシールドを狙うなら私達は敵同士ってことになる」

「だから、そうやって決めつけない為に話し合いつて大切なんだと思う……」

「言葉だけじゃ、伝わらないから。だから賭けて、お互いのジュ

エルシードを1つずつ」

フェイトはバルディッシュをサイズフォームにしてなのはに斬りかかるがなのははすぐに飛行して避ける。

しかし、気付けば既にフェイトがなのはの背後におり、バルディッシュを振りかざすがなのははレイジングハートで受け止める。

「気付かれた……!？」

まさか自分のスピードになのはが反応するとは思っていなかったフェイト。

「えへへ、ランちゃんと鏡太くんに鍛えて貰った成果かな？」

実はなのはは前回フェイトにボロ負けした為、ランと鏡太に頼み、自分を鍛えて貰うように言っていた。

そして今、その成果が表れている。

一方、アルフはオレンジの狼の姿となり、ユーノと鏡太と対峙している。

ユーノの説明によるとアルフは「使い魔」と呼ばれる者らしく、主である魔導師に仕えている。

林の中でアルフとユーノと鏡太は戦い合い、隙についてユーノに喰らい付いたが。

「おぶうつ!!!？」

それは鏡に映っていたユーノであり、鏡にアルフはぶつかったのだ。

「いったあゝ!?!」

後ろを振り向くとそこにはミラーナイトになった鏡太があり、両手を広げていた。

「鏡を作るのは得意でね、知らなかったかい？」

その隙にユーノがバインドという拘束魔法でアルフを拘束。

「くっ、しまった!?!」

しかし、それをオーズスタジヤドルコンボに変身した光が引き千切る。

「はああ!?!」

「なに!?!」

「アレは……」

だがそこにダブル・サイクロンジョーカーに変身したランとライトがオーズに蹴りを入れる。

「うわっ!?!」

『どういうつもりだ風上光、それになぜ君がライダーの力を……?』
「すいませんけど、僕の口からじゃ言えません!」

そこに丁度、炎斬とナオキも駆けつける。

「なにしてんだお前等!?!」

「お前等は手え出すな!!」

ナオキと炎斬は状況が掴めずにおり、置いてけぼりだった。

オーズはダブルと取っ組み合いになり、それぞれが戦い合う、しかしその時……。

なのはとフェイトに向けて何者かが発砲、2人は障壁で防ぎ、2人を襲ったのは銀色のロボット……かつて「仮面ライダーブラックRX」がかつて戦った全人類を抹殺しようとした「クライシス帝国」の怪人、「怪魔ロボット・シュバリアン」が銃口をなのはとフェイトに向けていた。

「ジュエルシードとやらを渡して貰おうか」

そこへ……竜也の飛び蹴りがシュバリアンに炸裂。

「ぬおっ!?!」

「竜也さん!?!」

さらにそこにシグナルマンも駆けつける。

「なにかあると来て見れば……後で署で聞かせて貰うぞ!!」

「って今日休みでしょ?」

「あっ、そうだった」

竜也は取り合えず事情は後で聞くことにし、腕のブレスレットを構えて叫ぶ。

「クロノチェンジャー!!」

すると竜也の姿は変わり赤い姿の戦士、未来戦隊タイムレンジャーの「タイムレッド」に変身した。

「タイムレッド!! なんかよく分からないけどさ、真剣勝負……してるんだよね? だったら邪魔しないように俺とシグナルマンがするよ」

胸を叩いて「俺に任せろ」と言った後、タイムレッドはシグナルマンと共にシュバリアンに向かって行く。

「行くぞ!!」

「シグナイザー!! ガンモード!!」

銃型の武器「シグナイザー・ガンモード」でシュバリアンを撃ち、タイムレッドは今は亡き、友より授かった「DVディフェンダー」という銃型の武器を手にとり、レーザー光線をシュバリアンに放つ。

「ぐあああ!!?」

「DVディフェンダー!! ディフェンダーソード!!」

剣型の「ディフェンダーソード」に変形させ、シグナルマンと共にシュバリアンと戦い合う。

「チッ、邪魔者共が!! エースキラー!!」

シュバリアンがその声をあげると上空から金色の身体をしたロボット、「エースキラー」が現れる。

「なに!? エースキラーだと!?!」

『ジュエルシードも大切だけど、今は旅館の人達の方が大切だ、早くみんなを避難させに行こう!!』

なのはとフェイト、アルフとユーノにミラーナイト、Wとオーズも争っている場合では無い為に、一時協力してみんなを非難させようとする。

タイムレッドとシグナルマンはシュバリアンと戦うことに専念。

「俺が時間稼ぐ!! 行くぜ、ファイヤアアアア!!!!」

炎斬の身体に炎が纏わり、彼は赤い巨人、炎の戦士「グレンファイヤー」へと変身した。

ウルトラマン以外の巨大な戦士は「仮面ライダー」しかいなかった為にタイムレッドもシグナルマンも驚きを隠せなかったが、今はそれ所では無い。

と言っても」は基本的に等身大だが。

「ファイヤーラリアット!!」

炎を纏わせた左腕でラリアットをエースキラーに炸裂し、エースキラーは吹き飛ぶ。

「行くぜえ!!」

グレンファイヤーは起き上がったエースキラーにそのまま飛び蹴りを喰らわせようとするがエースキラーに足を掴まれ受け止められてしまい、そのまま地面に勢いよく叩きつける。

「のわあああ!!?」

エースキラーから逃れるグレンファイヤー。

「いつてーなこの野郎!!」

エースキラーは右手をクイクイと手招きしてグレンファイヤーを挑発。

「ハハハ……あんまり舐めてんじゃねえぞ!!」

とグレンファイヤーがエースキラーに殴りかかったが、エースキラーはしゃがんでグレンファイヤーの拳を避け、グレンファイヤーの腹部を殴りつける。

「あらあ!!?」

さらに腕を十字に組みあわせ、光線、「スペシウム光線」をグレンファイヤーに発射する。

「ぬお!!? ファイヤースティック!!」

炎のスティック、「ファイヤースティック」を両腕で廻して回転させ、エースキラーの光線を防ぐが、スペシウム光線は初代ウルトラマンと同じ必殺技、その為威力が高くグレンファイヤーは吹き飛ばされてしまう。

「うわああ!!?」

エースキラーが一気にトドメを刺そうとグレンファイヤーに向かい走ってくるが、グレンファイヤーはジャンプしてエースキラーの背後に回り込み、エースキラーの腰に手を廻して転ばせ、逆さに持ち上げる。

「さてと、あんまりグレン様舐めるなよ？ こいつは効くぜ？ 皆さんお待ちかねの……グレンドライバー……！」

そのまま地面へとパイルドライバーの如く叩きつけ、グレンファイヤーはエースキラーから離れ、エースキラーは立ち上がるが火花を散らして爆発した。

「ひゃっほーいッ！！ 相手が悪かったな……！」

サムズダウンをした後、炎斬の姿にグレンファイヤーは戻った。

しかし、まだ戦いは続いている。

エースキラーがいなくなった為、なのはとフェイトの戦いも……。

第6話 『温泉激闘』（後書き）

戦闘か次回に持ち越しです。

次回の戦闘はタイムレッドとシグナルマン、なのはとフェイトが中心……？

なのはの特訓は次回回想で。

因みにJはもう見ました。

第7話 『三・人・転・校』（前書き）

やっぱり無印編でダイナとフォーゼ出します。
と言っても、本格的なのはA' Sになると思いますが、多分。

第7話 『三・人・転・校』

ディフェンダーソードでシュバリアンに斬りかかるタイムレッドだが、シュバリアンは腕の銃でタイムレッドに発砲し、タイムレッドを近づけさせない。

「くっ！」

シグナルマンはシグナイザーをポリスバトンという警棒型の武器に変形させ、シュバリアンに向かって行く。

タイムレッドと同時にディフェンダーソードとシグナイザーをシュバリアンに振りかざすがシュバリアンは鎌のある右腕でガードし、2人を押し返して鎌にある銃口から銃弾をタイムレッドとシグナルマンに発砲。

「くわああ!!?」

しかし、タイムレッドはディフェンダーソードをディフェンダーガンに組み換え、シグナルマンはシグナイザーを再びガンモードへ。

「スーパー戦隊ダブルシュート!!」

2人同時にシュバリアンを撃ち、直撃を受けるシュバリアン。

「おのれ!!」

再びディフェンダーソードとポリスバトンモードに組みかえる2人。

シュバリアンはシグナルマンを撃つがシグナルマンは全く動じずシグナイザーをシュバリアンに叩きつける。

「ぐわああ!!?」

「流石シグナルマンさん!!」

「宇宙の悪は許さんぞ!!」

シグナルマンに続き、タイムレッドがディフェンダーソードの刃を青く輝かせるファイナルモードにしてシュバリアンに向かって走って行き、シュバリアンはタイムレッドを迎え討とうシュバリアンもタイムレッドに走って行き、シュバリアンは鎌の様な腕を振るい、タイムレッドを攻撃しようとするもタイムレッドはディフェンダーソードでシュバリアンの腕を弾き、ディフェンダーソードでX字に切裂く。

「DVRフレイザー!!」

「ぐわああ!!!!?」

さらにシグナルマンがシュバリアンに接近してシグナイザーでシュバリアンを切裂く。

「シグナルスラッシュ!!」

2人の必殺技が決まり、シュバリアンは火花を散らしながら爆発した。

「ぐわああああ!!!!!!?」

「やりましたね」

「うむ!!」

シグナルマンとタイムレッドはがつつりと握手し、場所は先程なのはとフェイトが戦っていた場所ではなのはとフェイトが対峙している。

「結界を発動させたから、続きが出来る」

フェイトは静かになのはにそう伝える。

「どうしても……戦わなくちゃいけないの？」

なのははまだ話し合いをしようとしていた。

「さっきも言ったよね、言葉だけじゃ、なにも伝わらない。きっと私達は戦い合うことでしか分かり合えない」

フェイトは素早く動き、バルディッシュをなのはに振り降ろす。

ここでのなのは、鏡太とランに教えられたことを思い出した。

『いいか？ まず気配を察知したりする練習だ！』

という訳でなのはに目隠しをして100円ショップの玩具で買ってきた刃の部分が柔らかい刀でなのはが周りが見えない状態で受け止めることが出来れば解決。

『よっ！』

『ふにゃ！？』

当然かの如く頭を叩かれるなのは。

鏡太に至っては……。

『そうですねえ、心を落ち着かせることでしょうか？ 心を落ちつかせれば見えないものも見えるかもしれないからねえ』

と言われ何故か数時間正座させられるのはだったが、恭也や美由紀の剣道の練習を見る時は正座をしているので基本的にこれはすぐにクリア出来た。

（うん、幾ら早くても、気配で追いつけば――！）

なのははレイジングハートでバルディッシュを受け止め、フェイトを押し返す。

フェイトの背後にはなのはの桃色の魔力弾「アクセルシューター」があり、それがフェイト目掛けて飛んでくる。

（なっ！？）

フェイトはジャンプして避け、アクセルシューターを回避。

「やっぱりアクセルシューターの扱いはまだ難しいなあ」

（この子、前より強くなってる……？）

ランと鏡太の協力があつた為か、ユーノの教えもありなのはは原作よりも早く成長している。

以前はフェイトにボロ負けだったのにも関わらず、今回は互角に戦っている。

なのはのアクセルシューターはまだ健在、その為フェイト目掛けて迫ってくるがバルディッシュで斬り伏せる。

（この子のこと、甘く見ていたかもしれない……でも、それでもまだ私の方が……強い！！）

ビュンッ！と一瞬強い風が吹いたと思うと気配を感じ取れないほどのスピードを出したフェイトがバルディッシュをなのはの首元に突きつけており、するとレイジングハートがジュエルシード1つを取り出してフェイトに差し出した。

「レイジングハート、なにを！？」

「きつと主人思いの良い子なんだよ」

そこに丁度ラン、鏡太、ユーノ、ライトと光とアルフ、炎斬、ナオキがやってくる。

「負けてしまったようですね、なのは……」

「ああ」

炎斬は光を見てフェイトとの関係を聞く。

「ええつと、ごめん！ その話は後で！ 僕はフェイトさんにちよつとついて行かないといけないから！」

「はあ！？ お、おい待てよ光！！」

光はフェイトとアルフの元に行き、なのはが去ろうとしたフェイト達に「待って！」と声をかける。

「あ、あの、私高町なのはって言うんだ。 あなたの名前は？」

「……フェイト・テストロッサ」
「フェイトちゃ……あつ」

フェイトはなのはがフェイトの名前を呼び切る前に高くジャンプしてアルフと共に去っていき、光はオーズタジャドルコンボに変身してフェイトの後を追いかけた。

「言い訳を考えなければな、炎斬……」
「だなあ」

まあ、ナオキと炎斬と光、鏡太、竜也の部屋の1つはこの3人で使っているのなんとか誤魔化すことは士郎達には誤魔化せたが、竜也には正直に話す。

「そうか、そんなことがあったんだ」
「すいません、今まで黙っていて」

鏡太が申し訳無さそうに頭を下げるが、竜也は首を横に降る。

「いや、正直に話してくれて嬉しいよ。 だけど、俺の力が必要な時があったらいつでも言ってくれ。 俺は鏡太とランの保護者なんだからな！」

胸を張って竜也が言い、ランと鏡太も頷いた。

（しかし、竜也さんに迷惑をかけるのは……）

竜也にはあまり迷惑をかけたく無い鏡太、それはランも同じだった。

*

そしてフェイトのマンションに行った光は……。

「冷凍食品ばかりじゃ、ちゃんとした栄養取れないよ!!」

フェイトが「お腹空いたな……」と呟き、持ってきたのが冷凍食品だった為光は冷蔵庫を見ると冷蔵庫の中には冷凍食品しかなかったのだ。

「ちょっとタジャドルになって家に一気に帰ってちゃんとしたものとらないと……!」

その時、ここになってコンボになった時の後遺症が現れ、光は倒れこみそうになったがフェイトによって支えられる。

「ちょっと大丈夫かい!？」

アルフが光を心配そうに呼ぶ。

光は「すうすう」と眠っており、フェイトは光の顔を覗き込んで少し顔を赤くした。

(あつ、なんだか可愛いかも、寝顔／＼／)

数分後、光は目を覚まして寝かされていたベッドから飛び起きる。

「あつ、目が覚めた？」

隣にはアルフが座っており、光はキョトンつとしている。

「アンタ、オーズに変身して気を失ったんだよ」

「あつ、そっか……。あれ？ このベッド……」

アルフが「フェイトのだよ？」と首を傾げながら答えると光はみるみる顔を赤くしていく。

慌ててベッドから降りる光をアルフは不思議そうに見ていた。

「そうだ、シャワーとか借りていいですか？ 汗かいちゃって」

アルフは頷いて承知し、風呂場まで案内。

その後、風呂場から去っていき、元の部屋に戻った後「あつ！」と声をあげてなにかを思い出した。

（今、フェイトが使って無かったけ……。？ まあ、いつか）

良く無い良くない。

そして風呂場では……。

「「えっ……？ / / / / /」」

入浴中のフェイトと遭遇してしまった光がいた。

「ッ！！！！！／／／／／」

光は急いで戸を閉じて息を整える。

（そう言えばフェイトさんどこに行ったか聞いて無かった！／／／／／）

兎に角光はフェイトに謝罪。

「ご、ごめんなさい！！　その、アルフさんに汗かいたからシャワー借りていいかなって聞いたらしいって言われてその……／／／／／」
「う、ううん、その、えっと……私は、平気だから……／／／／／（アルフ、忘れてたのかな？）」

その後、色々あったが最後はフェイトに料理の作り方などを教えてアルフの背中に乗り、旅館にこっそり帰って行く光だった。

*

翌日の朝、なぜかランだけなのは、アリサ、すずかと同じ部屋で寝なければならぬというなんとも羨ましい状況になっていた。

ユーノも一緒なのでランにとってはそれが救いだったりするが。

そして朝、ランが目を覚ますと寝ぼけたせいか、なのはが自分の布団の中に入り込んでいた。

「ッ！！／／／／」

しかも少しなのはの着ている着物がはだけて右の肩が見えており、さらにランの顔を真っ赤にさせた。

「／／／お、おい、なのは……／／／」

ランはなのはを優しく起こすとなのはは今の自分の状況に気付き、ラン動揺顔を耳まで赤くさせた。

「ふ……ふにゃああ！！！！／／／／」

旅館になのはの叫びが響いたという……。

*

その後、士郎達がいるので戻って来ていた光からは何も聞けないまま帰って行った。

炎斬とナオキにも光がなぜフェイトに協力するのかその理由を聞い

てくるように言い、家に帰って光に炎斬とナオキは協力する理由を聞いたが。

「ごめん、僕の口からじゃ言えない。　僕が言っちゃダメなことだから」

と謝られ、炎斬とナオキはそれ以上なにも聞かなかった。

その後、光はなのは達と同じ学校に通ってる為、学校へと向かいなのはと遭遇したが……。

「光くんにはなにも聞かない。　フェイトちゃん本人の言葉からどうしてジュエルシードを集めるのか聞きたいから」

なのはが笑いながら光に言う、しかし光はなのはがどこか悲しそうな顔をしてるように見えた。

光となのは、アリサ、すずかは同じクラス、HRで担任の教師から転校生がくると聞き、転校生3人が入ってくる。

「モロボシ・ランだ。　分からねえことばかりかもしれないが、よろしく頼む」

「騎士鏡太と申します。　以後よろしくお願いします」

ランと鏡太が転校してきたのだ。

（ランくん！？　鏡太くん！？）

これにはなのは、すずか、アリサ、光が驚き、光に至っては目が泳いでいた。

そして最後の1人が胸をバンバンと叩き、人差し指をどこかに向かつて向ける。

「俺は如月シン！！ 夢はこの学校の生徒全員友達になる男だ！！もちろん、お前等とも友達になるからな！！」

ランと鏡太を指差すシン。

「は、はあ……」

「ハハ……ヘンなのキター」

鏡太は戸惑いながらも頷き、ランはシンは変な奴だと思っている。

「ランにシン……、案外似た者同士なんじゃないかい？」

ライトの一言が聞こえたランは「はあ！？」と声をあげる。

「ダチのピンチは見過ごせねえ、困ったことがあつたらなんでも言えよ！」

ニカッと笑いながらランに言い放つシン。

ランは一瞬シンを睨みつける。

「お前え！」

（えっ？　なんで怒ってるの？）

と一瞬なのはが思ったが……。

「いい奴だなあ」

ランのその台詞でなのはがずっとこけた。

「ういっす!!」

「ういっす!!」

「ういっす!!」

「ういっす!!」

「ういっす!!」

などとランとシンがやっているとき、アリサが「もういいから!!」と声をあげて2人のやり取りを止めた。

「えっ? なんだったの? 今の……?」

というすずかの呟き。

第7話 『三・人・転・校』（後書き）

シンがはやてとのカップリングだと思った人、ハズレです。

第8話 『この怒り／夜の街の戦い』 (前書き)

何気にあのギャグ漫画のキャラが……。

第8話 『Cの怒り/夜の街の戦い』

学校、休憩時間にアリサが突然なのはの机をバンッ！と叩いた。

「いい加減にしなさいよ！！」

すずかとアリサの話を聞かず、ポケーっとしているなのはに、アリサは腹が立ったのだ。

「う、ごめんねアリサちゃん……」

なのははアリサに謝るが「もういいわよ！」と怒鳴られてアリサは教室を出て行き、すずかはそれを追いかける。

「なんだ、喧嘩したのか友達と？」

シンに尋ねられ、なのははコクツと頷く。

「だったら今すぐ仲直りしに行けよ！ 悪いと思ってんだろ？ 原因がなんなのか知らねえけど……」

そこでランがシンの肩を叩いてシンを止めるラン。

「それはお節介ってやつだぞ、自分達のことは、自分達で解決した方が1番いい時だってあるしな」

シンは「だけど！」と言うが、ランが説得を続けてそこでようやくシンは諦め、ランはなのはの隣に来る。

「フェイトのこと、考えてんだろ？」

「……うん」

「お前はあいつとどうしたい？ お前はあいつとぶつかり合って、どうしたいんだ？ アリサと仲直りするのも大事だがよ、フェイトとどうしたいかを見つけないと、ダメなんじゃないか？」

なのはは黙ったまま、椅子に座ってるままだった。

「お前は良い奴だからさ、きっと分かってくれるさ。　アリサの奴も」

「有難う、ランくん」

「おう」

ランがサムズアップして笑顔を向けるとなのははみるみると顔を赤くして行った。

その後、ランは光をとっ捕まえて正座させ、フェイトとの関係を聞きだしていた。

「という訳で、さっさと吐いちゃった方が楽だぞ？」

なぜかランはサングラスをしており、どこからかカツ丼を出していた。

「えっ？　なにこの刑事ドラマ風？」

近くにはなのはと鏡太、ライトもいる。

「アハハ……実は刑事ドラマにランが少しハマったみたいでして……」

「うわゝ、美味しそう!!」

光に至ってはそのカツ丼を美味しそうに食べていた。

「美味そうに食ってんじゃねえぞ!! 俺だって食いたかったのに……」

「「食べたかったの!?!」」

「訳が分からないよ、ランがやってることは」

なのはと鏡太のツツコミが炸裂し、ライトはどこかで聞いたことがある台詞を喋る、なのはがフェイトに直接事情を聞くから光に聞くのはやめてくれとランに頼み、光は解放された。

*

その頃、光の家では……。

「おい、炎斬!! それ俺のアイスだろ!!」

「知るかぁ!! 俺だってアイスくらい食いたんだよ!!」

アंकと炎斬がアイスで取り合っていた。

「アイスくらいで取り合うな……」

ナオキが止めに入ろうとしたが……。

「黙ってる焼き鳥!!」

「なっ、無礼者!! 2人揃って私を焼き鳥呼ばわりとは!! 特にアंक、お前だけには言われたくない!!」

とこの3人が喧嘩をし始めていたとか。

光に至つては帰りにフェイトのマンションへと寄り道をしてフェイトと一緒に買い出しである。

「それで、フェイトさんはなに食べたい？」

光が微笑みかけながらフェイトに尋ね、フェイトは首を傾け考える。

「うーん」

「ハンバーグとかにしようか？」

「うん!!」

光の言葉にフェイトが頷き、スーパーで材料を集め始める。

さらに言えば、なのはとランもお使いという形でこのスーパーに来ており、買い物をしていた。

「ランくんもお使い？」

「ああ、まあな。竜也に頼まれて……」

それから2人は成り行きで一緒にスーパーを廻り、偶然にも光とフェイトには接触しなかったが、「ところてんコーナー」を通りかかった時……。

なにか人型のところてんが「10円」と書かれてところてんコーナー

ーに座ってこちらを見ていた。

「……」

「お客さん、今夜どこてん？」

（喋った！！？）

謎のところでんに話しかけられ、固まるランとなのは。

「俺さあ、今だったら10円だからお得よ？」

ランとなのははこのところでんを無視して立ち去ろうとするが……。

「なんで買ってくれねえんだああああああ！！！！」

「きゃあああああ！！！！？」

ところでんが猛スピードで追いかけてきた為なのはが悲鳴を上げ、ランに抱きつき、迫ってきたところでんをランが思いっきり顔面から殴った。

「なにしてんだメえええええ！！！！」

「ごぶうう！！？」

そのところでんは一撃ノックダウンされたが、なのはは怯えた表情でランに抱きついたまま。

「あ、あのさ、もうあの変なのぶっ飛ばしたから……／／／」

「ふえっ？ あっ／／／／」

なのはは今の状況に気付き、ランから離れる。

「あ、有難う／＼／＼／」

顔を赤くしながら、なのははランに言った。

*

光とフェイトがマンションに帰ってきた時には夕方だったのだが。

「ようやくどこ行ってんのか尻尾掴めたぜ！！」

炎斬、ナオキ、アंकが2人の後ろにいた。

「一体どこほつき歩いてんのかと思えば、まさかこんな所に来てたとはなあ」

「うえっ……、なんでいるの！？」

どうやら炎斬、ナオキ、アंकは光達の後をつけていたらしい。

「すまない、だがやはり気になってしまっただな。光、君には色々世話になっている。だから恩返しとしてなにか手伝いたいんだ」
「まっ、俺も借り作ったまんまじゃな」

上からナオキと炎斬が喋り、フェイトは警戒しているが、光が説明して警戒を解いて貰う。

「光の、知り合いなんだ」

「うん、みんないい人だから。アंकのことならフェイトさんも知ってるでしょ？」

そしてアルフを呼んでフェイトとアルフに炎斬、ナオキ、アंकも
ジュエルシード集めに手伝って貰ってもいいか尋ねた所、OKを貰
った。

「光の知り合いなら大丈夫そうだしね」

とアルフ。

「まっ、俺にとっちゃグリードが出てくる可能性があるから付き合
うだけだけだな」

「素直じゃねえなアंकちゃんよぉ！」

炎斬がからかうようにアंकに言い、アंकは「アंकじゃねえ！
！」と反論。

（まったく、伊達見たいなこと言いやがって）

*

その夜、フェイトがジュエルシードを強制発動させ、それに気付い
たのはとユーノがランと鏡太、ライトに連絡してユーノが結界を
張り、なのは、ユーノ、ラン、鏡太、ライトはジュエルシードのあ

る場所を目指す。

（まさか、こんな街中で！！）

そして同時にジュエルシードの近くに出くわすフェイト、光、アンク、炎斬、ナオキとなのは、ユーノ、ラン、鏡太、ライト。

「炎斬にナオキ！？ お前等なんで……！？」

「悪いな、ラン、鏡太、光に借りを返したいんでこっちについたわ」
炎斬が説明し、なのはとフェイトは既にバリアジャケットを纏っている。

なのはとフェイトは2人同時にジュエルシードを封印し、なのははフェイトに向け、自己紹介した。

「この間は自己紹介出来なかったけど、私、高町なのは」

だがそんなのはにお構いなしにフェイトはなのはに攻撃を加えるが、なのはは飛行して避ける。

「ッ！」

そしてなのはとフェイトは空中で激しく戦い合い、アルフとユーノも戦い始める。

「話し合いだけじゃ、なにも解決しないって言ったけど、それこそなにも解決しないよ……！」

なのはがフェイトにそう訴える。

「俺等はどうする？ やり合うか？ そういや、いつぞやの決着をあのバカ参謀に邪魔されたんだったけな。 決着つけようぜ、ラン！！」

炎斬がランに指を差して言い放つ。

「そっぴやそうだな、お前等、邪魔すんじゃないぞ」

「しょうが無いね、それじゃ、僕達は邪魔が入らない様に見学と行こうか？」

ライトの提案に光達は頷く、あんまり多く暴れ過ぎると周りに被害が及ぶからだろう。

ランはウルトラゼロアイを出し、目に装着。

「デュワッ！！」

「ファイヤーアアアア！！」

ランは等身大のウルトラマンゼロ、炎斬は等身大のグレンファイヤーへと変身し、グレンファイヤーは最速ゼロを思いっきり殴りつける。

「ぐわあ！！？ 先制攻撃とはやってくれるじゃねえか！！」

ゼロはグレンファイヤーにお返しとばかりに素早く動いてグレンファイヤーの顎にアッパーを喰らわせる。

「ぬわああ！！？ お前こそやってくれるじゃねえのゼロちゃんよ！！」
「ファイヤースティック！！」

炎のスティック型の武器「ファイヤースティック」を出すグレンフアイヤー、対するゼロはウルティメイトブレスレットから槍型の武器「ウルトラゼロランス」を出し、ファイヤースティックとウルトラゼロランスがぶつかり合う。

なのははフェイトのバルディッシュでの攻撃を避け、回避し、まだなのははフェイトに訴えている。

「競い合うのは仕方ないけど、でも！ だからって何も知らないで競い合うのは嫌だ！！ 私は最初はユーノくんの手伝いでジュエルシードを集めてた。 だけど今は違う！ 自分の意思で集めてるの！ そうじゃなきゃ、周りに迷惑がかかるから！！」

これが自分がジュエルシードを集める理由だとフェイトに話し、なのははフェイトがジュエルシードを集めている理由を尋ねる。

なのはの必死の呼びかけに、心動いたのかフェイトは口を開く。

「私は……「言わなくていい！！」ッ！」

フェイトが喋ろうとしたその時、アルフが口を挟む。

「周りに優しくされてばかりの甘ったれたガキンちゃんなんかにも話さなくていい！！」

その言葉に、ライトが眉を寄せる。

「甘ったれたガキンちゃん？ 姉さんのことを何も知らない犬に言われたくない！！」

「犬じゃ無くて狼だよ!」

「どっちでもいい、なにも知らない癖に、姉さんにそんなことを言う奴は僕が許さない。 ユーノ、選手交代だ」

ユーノは「えっ?」となり首を傾げる。

「まさか、戦うつもりなのか!? だってダブルになるには……!」
「心配無いさ、確かに僕は体力こそそんなに無いけどこれもある」

ライトが腰に装着したのはメモリスロットが1つの「ロストドライバー」であり、サイクロンメモリを取り出す。

『サイクロン!』

「変身!」

メモリスロットに差し込み、それを傾けるとダブルの両サイドをサイクロン一色にしたような「仮面ライダーサイクロン」へと変身した。

「僕は、仮面ライダーサイクロン」

サイクロンはゆっくりとアルフに近づき、アルフは身構える。

「姉さんは君に言った訳じゃない、フェイトに言ったんだ。 君に答える権利は無い!」

「あたしとやる気かい?」

サイクロンはアルフに向かい走り出す。

一方、ゼロはグレンファイヤーを逆さまに持ち上げてパイルドライ

バーのように地面に叩きつける「ゼロドライバー」を炸裂。

「うおらあああ！！！！」

「お前また真似しやがったなああああ！！！！！！？」

倒れこんだグレンファイヤーはすぐに起き上がり、首をコキコキ鳴らす。

「あー、首イテ」

髪をかき上げる仕草を見ると頭の炎が少し燃え、グレンファイヤーは再びゼロに向かい走り出す。

しかし、ゼロは真上に飛びあがり、グレンファイヤーはそこで立ち止まる。

「おおっ？」

「シエア！！！」

かかと落としをしてくるゼロ、だがグレンファイヤーは両腕でゼロの足を掴む。

「なに！？」

「おらよ！！！」

グレンファイヤーはゼロを振りまわして投げ飛ばす。

「おわああ！！！！？」

なんとか着地するゼロ、ゼロは腕をし字に組み、必殺光線である「

ワイドゼロショット」をグレンファイヤーに放つ。

もちろん威力は抜いている。

「シユアアアア！！！」

グレンファイヤーは両腕を前に突き出して放つ炎、「ファイヤーブラスター」を发射し、ワイドゼロショットとぶつけ合わせ、2人の間に爆発が起きる。

「ぐわあああ！！！？」

「こんなゴチャゴチャした戦いに、グリードとかが責めたら面倒だな」

アंकが言い、光は「まさか」と笑っていたが、2人の顔の前に水が通り過ぎる。

「……」

左を向けるとそこにはシャチの頭に見た目ですぐに女性の怪人だというのが分かる「水棲系グリード・メズール」と、頭はサイのようであからさまにパワーがありそうな「重量系グリード・ガメル」が現れる。

「メズール、ガメル！！」

「久しぶりね、アंक」

アंकが2体のグリードを睨みつけ、光は「あれもグリード？」とアंकに尋ねると「ああ」と答える。

「光、あいつ等からコア横取りしろ!!」

アंकはタカ、クジャク、コンドルのメダルを光に渡し、光はオーズドライバーを装着。

「分かった、行くよアंक」

オーズドライバーにメダルを入れて行き、オースキャナーをとって中央部をスキャン。

「変身!!」

『タカ! クジャク! コンドル! タ〜ジャ〜ドル〜』

光は「仮面ライダーオーズスタジヤドルコンボ」に変身し、アंकは怪人体になってガメルとメズールに戦いを挑む。

「ミラーナイト、私達も彼等を援護しよう。これはジュエルシードとは関係無いからな」
「分かりました」

鏡太とナオキもオーズとアंकと共にガメルとメズールに戦いを挑んだ。

こうして、それぞれが戦いを始めるのだった。

第8話 『この怒り／夜の街の戦い』（後書き）

書いてる途中、スーパーにはきつとあのところてんがいたらなんか面白そうと思い出してみました。

感想などお願いします。

第9話 『宇・宙・流・星』（前書き）

挿入歌「Giant Step」

挿入歌2「Shooting Star」

第9話 『宇・宙・流・星』

アルフが魔力弾をサイクロンに放つが、サイクロンは右腕を振るい風を起こし、緑の風の壁を作って魔力弾を弾く。

「んっ？ どこに行つたんだ？」

何時の間にかアルフがいなくなっており、サイクロンは気配を真上に感じて上を見上げると空中から急降下して爪を振るうアルフの姿が見え、サイクロンはアルフの爪で斬りつけられる。

「ぐああ！！？」

「なんだい、口ほどにも無いねえ」

「それは、どうかな？」

次の瞬間、サイクロンは目にとまらぬ速さでアルフの周りを高速で走り回り、アルフを翻弄。

「くっ、ちょこまかと！！」

アルフは手当たり次第サイクロンを攻撃するが早すぎる為追いつかず、右横からサイクロンのキックを喰らい蹴り飛ばされる。

「ぬああ！！？」

オーズ、アंक、鏡太、ナオキはガメルとメズールに戦いを挑んでいた。

「俺、アंकとオーズ倒す！！」

見た目は「完全体」呼ばれる形態だが、本来の力を発揮出来ていないメズールとガメル、ガメルは強烈なパンチをアंकに喰らわせ、後退してしまう。

「ぐう！？ 相変わらずパワーバカか、ガメル」

怪人体のアंकは背中に翼を広げて空中に飛行し、両手からガメルに炎を放つがガメルは両腕を交差して防ぎきる。

「チツ」

「私に任せろ。 ジャンフアイト！！」

ナオキが「ジャンフアイト」と叫んだ時、ナオキは本来の姿である等身大の「ジャンボット」となり、ガメルに接近し、ガメルとジャンボットは同時に互いを殴りつけ、どちらも吹き飛ばされた。

『ぬああ！！？』

「うわああ！！？」

等身大のミラーナイトになった鏡太とオーズタジャドルコンボの2人は共闘してメズールと戦っている。

「怪人といえどレディに攻撃するのは凌ぎないですね」

頭に手を置き、「うゝん」と唸るミラーナイト。

「んなこと言ってる場合か！！？」

そうアंकに怒鳴られ、仕方なくメズールと戦うことに。

「あら？ 結構紳士的ね、あなた」

「お褒めに預かり光栄です。 ですがジュエルシールドを狙ってるならあなた方には譲る訳にはいきません」

オーズは剣型の武器「メダジャリバー」を使い、メズールに斬りかかるがメズールは水流を左手からオーズに放ち、オーズを吹き飛ばす。

「うわああ！！？」

「はっ！！」

両手から銀色のナイフ、「ミラーナイフ」をメズールに連射するミラーナイトだが、メズールは跳びあがって避け、身体を液体化させてミラーナイトを攻撃。

「ぐわあ！？」

「はああ！！」

一方、ゼロとグレンは……。

「はあ、はあ」

「ぜえ、ぜえ」

体力の殆どを使い果たしたのかランと炎斬の姿に戻りぐったりしていた。

『まあ、仕方が無いか。 あれだけ暴れれば』

なのはとフェイトは空中戦を未だに繰り広げていた。

「やあああ!!」

「はあああ!!」

レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードのすぐ真上でぶつかり合い、その時強烈な衝撃波が起こった。

それには流石にグリードである3人も少し吹き飛ばされ、オーズ達もまた吹き飛ばされた。

「ぬおう!? なんじゃこりゃ!!!?」

炎斬とランもまた吹き飛ばされてしまい、ジュエルシードは宙に浮かんだままの状態であつておけば暴走の危険性がある。

「フェイトさん? なにを……?」

オーズは少し破損したバルディッシュをしまい、フェイトはジュエルシードに素早く接近し、それを両手で包みこむ。

ジュエルシードの力によりフェイトの手が切れて血が出たりしているのをオーズは見て急いでフェイトを止めに向かう。

「あら? あなたの相手は私の筈だけど?」

「邪魔だ!!」

メズールが阻んだがオーズはそのまま突っ込み、メズールはオーズに殴りかかったがしゃがみこんだオーズはメズールの腹部に左手に装備された盾のような「タジャスピナー」を押しつけ、そこから炎を放つ。

「きゃあああああ！！！！？」

炎により吹き飛ばされたメズールの身体から2枚のコアメダルが飛び出てアंकがそれに気付き、右手だけの状態で飛行してメズールのコアメダルを掴み取るアंक。

手に入れたコアは「タコ・コア」2枚と「ウナギ・コア」1枚。

「こいつは設けたな」

「メズール……！！」

メズールが大好きなガメルは急いでメズールの元に駆け寄ろうとするが。

『どこを見ている！ ジャンナツクル！！』

ジャンボットの左手がロケットのように跳び、そのままガメルを殴り飛ばした。

「うわあああ……！！！！？」

ガメルはそのままメズールの元まで転がりながら倒れこむ。

「フェイトちゃん……！！」

「無茶だ、素手でジュエルシードを止めるなんて……！！」

なのはとユーノがなんとかしてフェイトを止めようとしたのだが……。

「くう、お願い……止まって……。止まれ……!!」

両手が傷付きながらも必死にジュエルシードを止めようとするフェイト。

(母さんの為に……お願い!!)

だが、ジュエルシードからフェイトを無理やり退き離す人物がいた。

「無茶し過ぎだ」

それはオーズであり、オーズはフェイトとジュエルシードを無理やり引き離したのだ。

「離して!! 私ジュエルシードが!!」

「分かってる、だけど、此处は僕に任せて」

オーズはタジャスピナーの中にオーズドライバーにあるタカ、クジヤク、コンドルのメダルを入れるとオースキャナーでタジャスピナーに押し当ててスキャン。

『タカ! クジヤク! コンドル! ギンギンギンガスキャン!』

オーズの背中に赤い翼「クジヤクウイング」が展開してオーズは飛行し、オーズの身体を赤い炎が纏わり、不死鳥のような形に炎はなつて突っ込むタジャドルコンボの必殺技「マグナブレイズ」をジュエルシードに繰り出し、爆発が起きてジュエルシードは封印され、爆発の炎の中からオーズが跳びだし着地。

「封印……出来たの?」

「オーズは俺達グリードを封印する力があつたからなあ。 ジュエルシードみてーなもんを封印するのもたやすいのかもな」

なのはの疑問にアंकが答え、「えっ？ 誰？」っと人間態に戻つたアंकに怯えつつ離れて行く。

「おい、なんで逃げんだ！？」

「ひえ！？」

涙目のなのはにランが駆け寄る。

「もう大丈夫だ、なのは」

「ら、ランくん……」

ランが来て安心の表情を見せるなのは。

「なんで怖がつてんだ？」

「そりゃオメー、どう見てもこえー不良だもんな？」

と馴れ馴れしく自分の肘をアंकの肩に乗せる炎斬。

「お前に言われたくないんだよ金髪野郎！！」

「お前だつて金髪だろうが！！」

そこで仲裁に入るジャンボット。

『喧嘩をするな！ まだグリードがいる。 戦いは終わっていない』

「かゝっ！ 相変わらず頭硬いねえ？」 焼き鳥

『焼き鳥では無い！！ 無礼者！！』

炎斬に対して怒るジャンボット。

メズールとガメルは立ち上がり、引き上げの準備を始める。

「一旦引き上げましょう?」

「わ、分かった」

ガメルの額にメダルを1枚入れられるような穴が出現し、その中にガメルが自身のセルメダルを2枚、メズールが1枚入れるとガメルの身体からエイとサイを合わせた「エイサイヤミー」とバイソンのような「バイソンのヤミー」が生まれた。

「うおおおお!!!」

バイソンのヤミーは重力を操り地面をえぐらせて巨大な岩を炎斬、ジャンボット、アंक、ラン、なのは、ユーノに向かい投げつける。

『うわあああああ!!!?』

『サイクロン! マキシマムドライブ!』

そこにサイクロンメモリを右腰の「マキシマムスロット」に差し込み、横を叩いて必殺技を発動させたサイクロン。

サイクロンは右拳に緑色の風を纏わせ、岩に向かって突き出す。

「サイクロンストームパンチ。 やあああああ!!!」

すると突風が巻き起こり、風が岩を砕いたのだ。

「ライト!!! ナイスだよ!!!」

「流石なのは弟!!」

ユーノとランがサイクロンにサムズアップを向ける。

だがその隙にメズールとガメルは既に逃亡しており、エイサイヤミーとバイソンヤミーだけとなった。

「うつつ」

オーズはコンボの副作用が遂に出た為、強制的に変身が解除されてしまう。

「あつ」

フェイトは光に駆け寄り、心配の表情を見せるが「大丈夫」と微笑み、フェイトを安心させる。

「オーズは変身不能、ランと炎斬、アंकも疲れている。ミラーナイトもそれなりに疲れてるだろうし、なのはとフェイトも同様となると……。ジャンボット、君はまだ平気かい？」

『ああ、私はまだやれる!!』

一歩前に出るジャンボット、しかしその時、「青い流星」のようなものが2体のヤミーにぶつかり、さらに吹き飛ばされた2体のヤミーに空中から右手にオレンジのロケットを装備した白い宇宙飛行士のようなライダーが2体を殴りつけ、地上へと殴り飛ばした。

「ぐわあああ!!?」

エイサイヤミーが先に立ち上がり、「何者!?!」と叫ぶと、青い流

星の中から黒く、流星のような青い顔をした「仮面ライダーメテオ」とロケットが消えて地上に降り立った白い「仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツ」が姿を現した。

「2人の仮面ライダー……？」

「宇宙……キター……！！！！！！！！」

両手を広げて叫ぶフォーゼ。

「仮面ライダーフォーゼ！！ タイマンはらして貰うぜ！！ サイ野郎！！」

フォーゼはバイソンヤミーを指差して使命。

「俺はバイソンだ！！ サイはこっち！！」

「どっちでもいい！ 行くぜ！！」

フォーゼは背中ブースターで一氣にバイソンヤミーに近づき、バイソンヤミーを蹴りあげる。

「ぐおおー！！」

「仮面ライダーメテオ！！ お前の運命は俺が決める」

エイサイヤミーは腕を鳴らしてメテオに攻撃を仕掛けるが避けられて廻し蹴りを食らわされる。

「ほあちゃー！！」

「ぬー！！？ これはどうだ！？」

エイサイヤミーの身体から無数の小型の「エイヤミー」が飛んで来

だが、メテオは動じずに右腕に装着された「メテオガンレット」に腰にあるドライバーの「メテオドライバー」に差し込まれた「メテオスイッチ」を抜き取り、メテオガンレットの左側部ソケットに差し込む。

「一気に決めてやろう」

『リミットブレイク！ OK？』

「ほお〜！ わちゃちゃちゃちゃ！〜！！」

「スターライトシャワー」と呼ばれる高速連続パンチの必殺技をエイヤミー達に次々に喰らわせていき、どんどん撃退されて行く。

「なに！！？」

「わちゃあ！！」

跳び上がったメテオはエイヤミーに急速接近して蹴りを喰らわせる。

「ほお〜！！」

両手を広げてファイティングポーズを構えるメテオ。

バイソンヤミーは重力を操ってフォーゼの動きの自由を奪おうとするが、フォーゼはそれより早く腰に装着されたベルト、「フォーゼドライバー」の4つ差し込まれているスイッチを1つ引き抜いて別のスイッチを差し込み、そのスイッチを押す。

『ホッピング・オン』

フォーゼの左足にピンク色のホッピングのような「ホッピングモジ

ユール」が装備されてホッピングモジュールのスプリングでぴよんぴよん跳ねて空中からバイソンヤミーを踏みつける。

「ぬわああ!!?」

「続いてこいつだ!!」

ホッピングスイッチを消し、2つスイッチをドライバーから入れ替える。

『チェーンソー・ガトリング・チェーンアレイ・オン』

右足には青いチェーンソーの「チェーンソー・モジュール」、右腕にはチェーンアレイが先についた「チェーンアレイ・モジュール」、左足にガトリングがついた「ガトリング・モジュール」が装備された。

「行くぜ!!」

フォーゼドライバーの右側についたレバーを一度退く。

『ガトリング・チェーンソー・チェーンアレイ・リミットブレイク』

まずチェーンアレイでバイソンヤミーを重力を使われる前に下から上に殴り飛ばし、ガトリングで空中に殴り飛ばされたバイソンヤミーをガトリング・モジュールで撃ちまくる。

「ぬわああああ!!!!?」

そしてバイソンヤミーが地上に落下する直前にフォーゼが素早く走り、バイソンヤミーが落ちてくる瞬間を狙ってチェーンソー・モジ

ユールでバイソンヤミーを切裂く。

「ライダー凶悪アタック！……！」

『ネーミングセンス無っ！？　でも確かに凶悪！！？』

殆どの者達からそうツッコまれるフォーゼだが、そのまま必殺技が決まり、バイソンヤミーは爆発してメダルが散らばった。

「ぐわあああああ！……！？」

「お前ももう終わりだ」

再びメテオガンレットにメテオスイッチを差し込むメテオ。

『リミットブレイク！　OK？』

高く跳び上がり、空中から急降下キックを繰り出す必殺技「メテオストライク」がエイサイヤミーに決まり、エイサイヤミーは直撃を受けて爆発し、メダルが散らばった。

フォーゼはラン達に振り返る。

「いや、俺も思ったよ。　やってる途中からこれ結構エゲツねえつて。　まあ、それは置いておいてだ！！　俺は仮面ライダーフォーゼ！！　全てのライダーと友達になる男だ！！」

（んっ？　どっかで聞いたような台詞だな……？）

この時、ランはなんとなくフォーゼの正体に気付いた。

「ほら、行くぞ」

「えっ？　あっ、ちょっと！？」

そのままフォーゼとメテオは何処かに去って行ってしまい、一同はただ苦笑いするだけだった。

第9話 『宇・宙・流・星』（後書き）

いや、書いてる途中で自分も思いましたよ、チェーンアレイとチェーンソーとガトリングのリミットブレイクは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302y/>

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSAGA

2012年1月8日19時50分発行